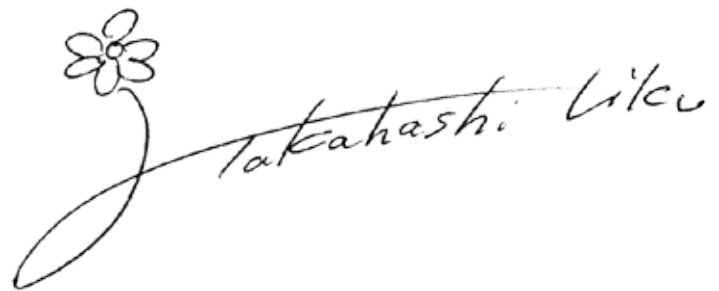




LIKU MARIA TAKAHASHI

ART WORKS

A handwritten signature in black ink that reads "Takahashi Liku". To the left of the signature is a small, simple line drawing of a flower with five petals and a central stem.

全盲の人のために発明したはずのマリスは
健常者のための世界平和と愛の啓蒙のツールでした

Liku Maria Takahashi

はじめに

私の美術の土台になっていることがあります。

一つは、父の影響です。

私の父は3才の時片目を失明し、その後母と結婚して私が生まれました。母の祖父も両眼を失明していたため、2人の結婚は多くの人が反対したと聞いています。

ありがたいことに、いたって目がよかった私は、今も多少近眼になったこと以外問題なく作品制作を続けています。私にとって目が見えること自体が"ない"かもしれない奇跡でもあるのです。

幼いころから父に、"片目が見えないということ、両目が失明したらどうなるか"の問いを投げかけられてきました。

視覚障がい者も絵を観たいと思っています。彼らの気持ちを知っていますか？

2009年、私は今まで視覚障がい者を含んでいなかった絵画の鑑賞者を全人類に拡大することに成功しました。その絵画技法を「マリス」と名づけました。「マリス」は、全人類が鑑賞できる初めての絵画として世界に優しさを発信します。「マリス」は、「視覚障がい者の絵画鑑賞行為をとおして晴眼者の理解のスイッチを入れる場の創造」です。

偏見は、人間のエゴを取り去ることで超越することが可能です。「マリス」で描いた絵が展示されている場合は、晴眼者が同じ絵を指で鑑賞する視覚障がい者の姿を目にしたり、その光景をイメージしたりすることで障がいの有無、人種、ジェンダーはもとより、すべての偏見を超える LOVE&PEACE に気がつく場所です。つまり私のアートは、哲学的に言えば「UNDERSTANDING」を「絵画を起点に誘発する」場作りです。

いま、私は2020年からパリを中心にヨーロッパ全土で、アートの力で世界を優しくする LOVE&PEACE のアートムーブメントを起こす準備をしています。

'70年代から'80年代半ばヨーゼフ・ボイスはアートで世界を変えようとしていました。私は長年ボイスの残した珠のような言葉をコンセプトの根本、つまりバイブルとしていますが、彼との違いは、私は「アートは政治も宗教も全く関係ない」と位置づけていること。私はボイスの政治的思想と宗教観を取り去り、彼の思考の土台であるルドルフ・シュタイナーの神秘主義思想と哲学的思考を、日本古来のアニミズムと武士道に差し替えたものを土台としています。

洋の東西を問わず、ボイスの[社会彫刻の概念]は力強く私に語りかけ、私は自らの作品を通して理想の社会作りをメッセージとして発信しています。

アートは私たちに気づきを授けてくれます。世界を変える力があります。

現在はわかりませんが、1990年過ぎ頃の日本の彫刻の学生は、絵画の学生と違い、作品についての白熱した議論をしていなかった記憶があります。私の大学時代は、誰とも芸術論を語り明かすことなく、ただ自分と大事なボイスの本。そしてFRPとの格闘でした。また当時、現代美術とは何か明確に答える人も本もありませんでした。現物が見たい！と、自分の中で現代美術の答えを探すために、パイクやキーファー、クリストやイサムノグチ、川俣正、ニキ・ド・サンファアーレといった立体作家の作品を、美術館の中だけでなく外までも、がむしゃらに追っかけていました。

結局のところ、自らの現代美術を探すためには、自分で理解できた断片をかき集め、それだけをどこまでも追求するしかありませんでした。出てきた私の結論は、「哲学用語を用いて語っては、一般の人に伝わらない」。そのために、「難解なことをわかりやすく表現して、鑑賞者に思考させる。」ことを自分はアートでやろう、と決意したのです。

一部の観衆にだけ理解を促すよりも、簡単に理解しやすいメッセージを広く発信し、なるべくたくさんの人に「思考する材料」を送る。それが私の社会啓蒙のアートです。

そして、アートを通して人類の精神レベルを1つ「愛」に近く引き上げることを目標に、作品作りとアートプロジェクトを世界に向けて行っています。

美大を卒業して20年たち、自然体になった今、驚いたことに、「高橋さんは、日本のヨーゼフ・ボイスだね」と言葉をかけられるようになりました。

マリスの誕生

安心して！飛べないハードルは目の前に出てこない

「立体はスペースがないので絵でお願いします。」立体作家の私は、2009年の1月、初めてNYのギャラリーから個展を頼まれました。

NYでは彫刻の人が絵画を描くのは常識的な観があり、前からいろいろなNYのギャラリー関係者に絵を描くことも勧められてはいました。もちろん絵は受験の時から描き続けてきたものの、個展で人に見せることは全く考えずに、とても個人的に五枚の花びらの絵だけを何年も描いてきていたので、当時の私としてはかなり当惑したのを覚えています。

個展は6月と7月、そのギャラリーがセントラルパークのはずれに位置していたので、公園の木々から緑の涼しい風が、建物の打ちつけの窓をするりと抜けて気持ちよくふき抜けるイメージでメインテーマを決めました。公共の場に設置する目的の大型の彫刻ばかり制作していた私は、コンセプトを[その場を最高に生き生きさせるための不思議な装置をつくる]という、普段どおりのところから引っ張ってきました。

緑系の4色を使った「ミント」。桜の季節に描き始めた、ピンクの「チェリーブロッサム」の、2つのシリーズ。そして後からいろんな色を使いたくて虹の7色を使った「雨上がりの花たち」の一枚を含む、全17枚の花の絵です。

ミントの12枚をアクリル絵の具で描きあげ、アトリエの窓に並べたところ、自分でも驚いたことに、[ミントの香りの風が吹いてきている]ような気がしました。そう、これが表現したかった。でも描いた自分だけが感じてても面白くない。みんなに感じてもらうには、そうだ！香りを絵につけてしまおう。

百人が見ても百人がわかる。すごいことかもしれない。

そこからは、ものの20分ほどで、今のマリスの原形までもっていきました。香りは自分のはまっている、ハーブエッセンシャルオイルを塗る。アクリル絵の具は、石油系で乾くとビニールのような素材に変わります。その上に各色のイメージにあった香りをつければはじめのコンセプトにピッタリ合います。しかし、香りは飛びやすいので、ほんの何時間か一日くらいしか、この楽しさはもちません。長続きさせるために、次に考えたのは、フタを開けた香水瓶のように、凹凸のあるものの凹んだところに香りを留めておくこと。当時、石やFRPで作品を作っていた私は、すぐに石の粒を絵に接着することを考えました。そこではじめて、石の粒には大きさがある。どのサイズか決めないといけない、という大事なことに思考がたどり着きました。立体作品をグライNDERで磨くとき、サンドペーパーのように番定ごとに、粒子のサイズの違う砂粒がいっぱい出てきます。なるほど、砂粒のサイズを色の濃淡で変えるなら、「なんと、全盲の人が絵画をわかるんじゃないか！」

その時から今まで、ワクワクと興奮の日々の連続になりました。まだ世界中のアーティストの誰も、砂粒のサイズを変えた絵画を描くことに気づいていなかったのです。



mint (country road series) の一部
2009 マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) M30 × 260 × 90 (cm)
©Liku M. Takahashi

マリスとは

マリスとは、世界初、全盲の人も鑑賞できる絵画とその絵画技法です。現代美術のアーティスト高橋りく (Liku Maria Takahashi) が2009年に発明しました。画材は砂とアクリル絵の具で、色の濃さ (明度) が濃い程大きな砂を使用。色味 (色相) はハーブエッセンシャルオイルを絵の表面に塗布し、香りで表現します。

マリスの技法3つの大切な構成要素として
①マリスは、砂の粒度と香りが対応するマリス世界統一基準表に則ります。「マリス世界統一基準表」の明度10段階と、色相10段階は、高橋の基準によるものです。
②砂粒の大きさの違いで濃さを表します。濃い色ほど粒が大きくなるというルールだけ知っていれば誰でも鑑賞できます。砂の粗さの違い＝モノクロ絵画 (色情報の85%)
③香りの違いで色相を表します。黄色はレモンの香り、紫はラベンダーの香り、のように色のイメージのハーブエッセンシャルオイルを塗布します。砂の粗さの違い+香り＝色どり豊かな絵画 (色情報の10%)

色の3要素のうち、明度と色相の2つが通常人々が感じる感覚の情報のほとんどを占めています。マリスは全盲の人の指で認識できる砂の粒度の差を利用して色の濃さを表現しています。白から黒に近い濃さの色の10段階の違いを指に砂の大きさの違いで伝えます。点字は六個の突起で1文字を表記するため、点字を読む全盲の人の指先は訓練で鍛えられています。粒度の基準を設定するために日本ライトハウス情報センター他、全盲の方々の多くの協力のもと、高橋は自らの発明から5年間改良を重ね、現在の改訂版マリス基準表にたどり着きました。

砂の粒度は明度 (色の濃さ)、香りの種類は色相 (赤系や青系) を表します。緑色ならばセージのハーブエッセンシャルオイルを用いて、完成したマリスの絵画の砂の表面に筆で塗布します。香りは通常1日で消えますが、ハーブエッセンシャルオイルは砂と砂の間に溜まるので、何回も塗ると小さな香水瓶の蓋を開けたような状態になり、長く香りが続きます。香りの嗅ぎ分けは個人差がとてもあるのですが、目安として鼻の良い人で、10回塗ったものなら約1ヶ月香りを覚えることができます。色の3要素のうち彩度は絵画鑑賞には大きな役割を果たさないためマリスの情報伝達から省きました。

全盲の人が絵画鑑賞や色彩を指先や香りで鑑賞することは、五感の内の触覚と嗅覚の2感を使うことになります。これは、言葉を聞いたり文章を読むことでイメージを再現する、聴覚の刺激とは異なる体験です。

マリス技法で描かれる砂を用いた絵画は、指先を通して鮮やかな花や色彩豊かな絵や世界国旗を、全盲の人たちに伝えることができます。もちろん国旗の鷲の絵の細かな部分や、大きなポピーの絵の全体像を把握するには、繊細な指先の感覚や、多くの時間が必要である等の条件はあります。その点で現代美術のマリスの技法は、科学的な白か黒かという実証主義的なものではなく、あくまでもアートとしての曖昧さがあります。特に香りではその曖昧さがアートとしておもしろい！という価値になります。ぼんやり遠くの距離からある絵を見たとき、緑と黄色が混ざり合った色に見えるのと同様に、香りも緑のセージの香りと、黄色のレモンの香りが混ざり合います。また、ある程度近く of 距離で絵を見ても、緑と黄色が細かく入り組んでいる絵ならば、それは黄緑色に晴眼者にも見えます。

画家が黄緑色をパレットのうえで作る時も、緑と黄色を混ぜて黄緑色を作ります。その際、緑と黄色が混ざったように目には映りますが、緑の顔料の粒子と黄色の顔料の粒子が入り混じり、しかし、完全に溶け合う訳ではない顔料もあるのです。あくまでも隣同士の緑と黄色の顔料の粒子がミクロ単位で隣あっているのです。

それを、共感覚を利用して全盲の人にも、緑のセージと黄色のレモンの2つの香りが合わさったもの、と、マリスでは伝えています。

絵を鑑賞する際、ほとんどの色情報を明度として得ています。マリスでは明度が85%の情報を伝えることに着目。粒度の差を利用した砂粒(明度)の触覚で、色情報を表現することに成功しました。マリスでは色相(10%)を明度(85%)の補足として扱います。色が細かく入り組んでいる箇所の多い絵は、香り(色相)をつけません。

目の見える人が絵画を鑑賞する際、1つ1つの色を識別せずに全体で1枚の絵として見て、近づくことで細かい色彩を判別するのと同様に、マリスでも近づけば1つ1つの色の香りを嗅ぎ分けることができ、離ればすべての色が混ざり合った絵の印象を表す香りを感じることができます。

※香りをつける色面の大きさには限度があります

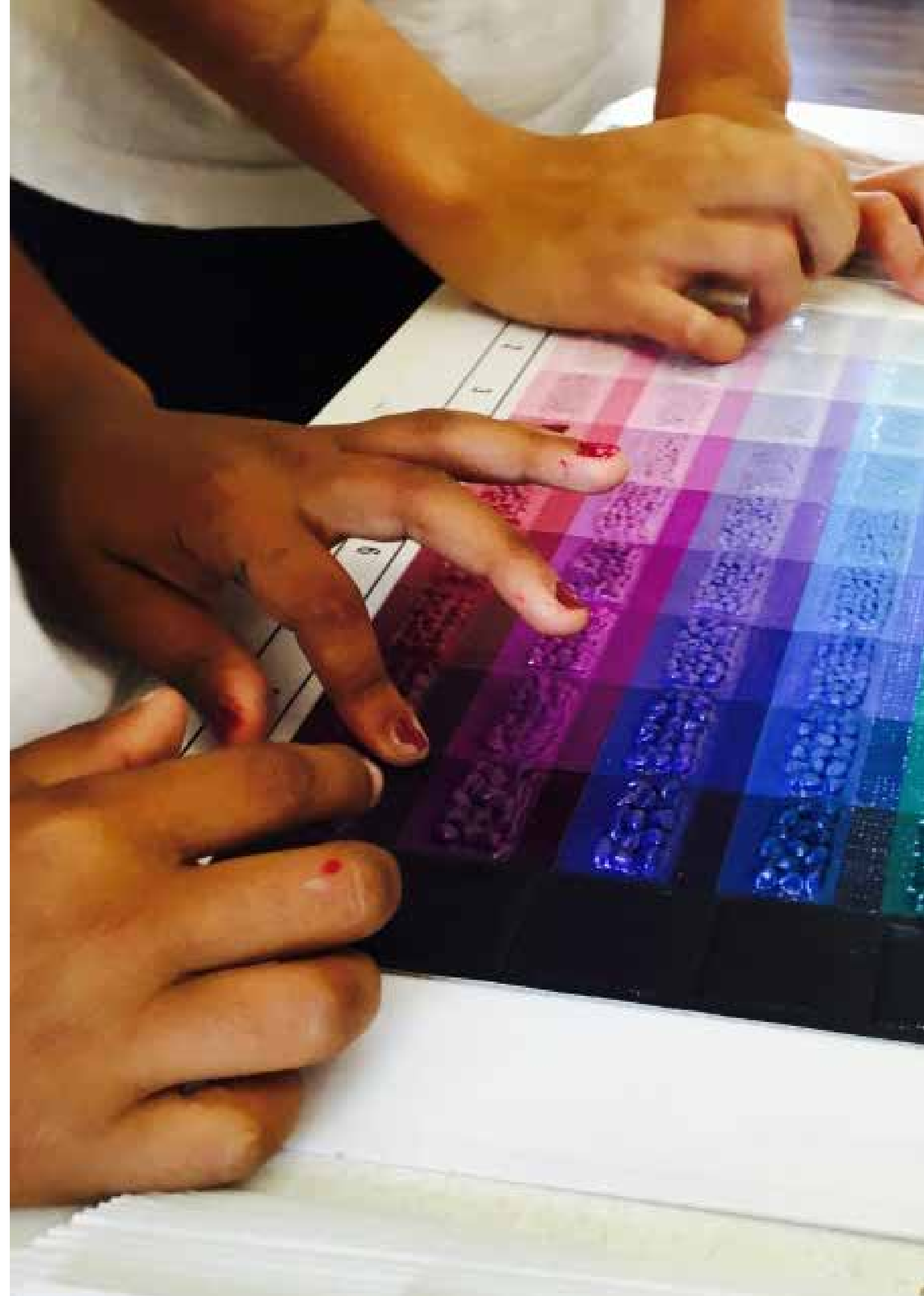
(マリス世界統一基準表 2018.8.17 追加事項より)

規定：香り塗布上、10×5(cm)以上の面積のみ香りを塗布。
規定以下の面積の場合香りが非常に混ざりやすく正しい情報が伝わりにくい為。

※マリス世界統一基準表の色相は色彩学に基づき10種類。
原色と中間色で成り立ちます。色相についての詳細はヨハネス・イッテンの色彩学を参照してください。



マリス世界統一基準表の一部
©Liku M. Takahashi



マリスアートプロジェクト

マリスが誕生し、視覚に障がいのある人を含め、絵画の鑑賞者を全人類に広げることができました。マリスを、あらゆる人が平等であるという根源的な人間の尊厳に基づき、あらゆる差別を取り除いていく原動力を創造する。マリスアートプロジェクトでは、マリスをツールとして、アートからダイバーシティ社会への橋渡しをする制作活動を実施しています。

マリスは厳密に言えば、世界中の視覚障がい者が、絵画という人類の芸術に参加できるツールに過ぎません。しかし私は、マリスがそこから広がる大きな意味合いを持つと考えます。まさに、「愛を中心にした心の時代」のキーの1つになり得る可能性を持っているはずです。

健常者が、障がい者のまごとの存在を、自分達の社会にどんなふうに迎えるか、をマリスは問いかけます。一人の人間の人生の中で、他の人のためにどれくらいのことをできるか、それが人間のこれからの「生きる価値基準」になると思います。

障がい者は、自らができることの限界を突き破り続けて生きています。そんな素晴らしい生き方をしている彼らは、そうでないと生きていけないために、必要に迫られている現実が厳然とあります。その障がい者が便利でのびやかに、豊かな生活ができるよう、可能な限り健常者が支えていくことができれば、その社会は人間のコミュニティの正しいあり方に向かっていて、と私には思えます。生きるとは、精神的に強く正しく「生」を学ぶことです。なにかを失っていないながらも、強く正しく生きようとする人の代表である[障がい者という人類の特別な存在から、我々健常者が学ばせてもらう]ことであると、私は断言します。

彼らは、私たち健常者よりももっと活発に、強い意志と忍耐力で前へ進んでいきます。障がい者は、表向きは社会的弱者として扱われがちですが、真の人間としての意味では強者であることに、健常者はそろそろ気づかなくてはなりません。例えば、全盲の人は、毎日出かける時に電車に乗って、ホームから落ちるかもしれない危険を覚悟で外に出ます。実際年に2、3回落ちている人も稀ではありません。それ程に外に出ることの価値を、彼らは理解しているからです。健常者は、あまりにも自然すぎて忘れがちな、外の世界で得ることの意味を、白杖を持って歩く姿から発せられるメッセージを、もっと深く受け取るべきだと思います。

全盲の人は日本では障がい者手帳一級です。いわば障がい者の代表とも言えるでしょう。ヘレンケラーに影響を与えた塙保己一をはじめ、すばらしい功績をあげている人も少なくありません。しかし現状では、全盲の人の生活に関して言うと、国からの生活補助は一般の人の生活できる金額に比べて明らかに少なく、目が見えないことで、特別な経費も余分にかかることを考えると、もっと社会全体の体制から手を差し伸べる必要が大いにあります。また盲教育では、他の知識では非常に優秀なのに、国旗の絵柄は2・3カ国しか知らない大学生がほとんどです。

彼等には知る権利があり、我々晴眼者は知る権利に可能な限り答える義務があるはずではないでしょうか？その一つの可能性として、マリスは障がいの有無に関わらず、すべての人にわかる絵を伝えることができます。

不可能に思えることが、ほんの少しの発想の転換で障がいを乗り越えることもできることを証明する1つのモデルといえます。

マリスアートプロジェクトの6つの試み

1. 障害の有無を超えて絵画を鑑賞
世界中の美術館において全盲の人が手で触れて鑑賞できる作品はあまり多くありません。2011年NYで「7つの美術館前デコレートアクション」を行いました。美術館の外ではすべての人に開かれた美の鑑賞ができる試みです。想像してください。いつか世界中の美術館にマリスの展示スペースが作られ、目の見える子と、目の見えない子が一緒に絵画を楽しむことができればどんなに素敵なことでしょう。

2. 五線譜のように世界中どこでも同じ基準で
国を超えてマリスを鑑賞できるように活動しています。マリスに世界統一基準表を設けることで、砂の粗さを音楽の五線譜と同じように、国境を超え世界中のどこでも同じ美を体験することができます。そうすることで将来的にはアルゼンチンのアーティストが作った絵画をロシアの盲学校の子供が見えるようになることが理想です。

全盲の人の混乱を防ぐため、国を超え、人種を超え、すべての人が見える世界統一基準の必要性を私たちは考えます。そのために、現在ワークショップを各地で行っています。

3. 子供から大人までみんなが参加できる国旗づくり
美術とダイバーシティという観点で、今一番力を入れているのがマリス国旗プロジェクトです。みなさんに広く理解していただけるよう、世界統一基準表の他に、もうひとつの方法として、2012年春からマリス国旗プロジェクトを実施し196+1の国旗と難民国旗を一般の人も含めて共同制作を行っています。小さな子供でも制作可能です。

4. 共同で他国の国旗を制作
砂一粒一粒をその国の1人の人と思い、幸せの願いを込めて、丁寧に置いてもらっています。これは、他人の幸せを願って何かをするという行為です。マリスを通して小さい頃から他国の人を思う気持ちと世界観を育むことができます。

5. 触覚と視覚、互いに共有する新たな価値観
視覚障がい者には、触覚の美が存在します。点字を識別する繊細な指の感覚で美を味わう新たな価値観。マリス絵画から、目の見える人と目の見えない人の価値観が混ざり合い新たな美が生まれました。

6. 幼少期から思いやりの心をアートから
将来的に、各国初等教育の美術教科書に「マリスの国旗づくり」導入を目指して活動。現代美術のアートプロジェクトから、まざりあうダイバーシティ社会の土台をつくります。



マリス国旗プロジェクト

マリスアートプロジェクトの取り組みの1つ「マリス国旗プロジェクト」は以下の活動を行っています。

1. 共同制作ワークショップの実施

マリス技法で世界国旗を世界中の人と共同制作で作っていきます。このプロジェクトでは1粒の砂を1人の人に見立てます。人として置き換えられた砂に「この人が幸せになりますように」と願いを込めて置いていきます。他者の幸せを願って何かをする行為を通し"他国の人を想う思いやりと世界観"を育みます。

2. 共同制作ワークショップで作られた国旗の展示

国旗の砂粒は、誰かが見知らぬ他国の人々の幸せを願って置いたものです。平和への思いを手で触れて、香りを嗅いで、(目で見ても)、感じてもらいます。不可視とされる思いやりを砂粒で可視化し LOVE&PEACE を訴えます。

色をつけた砂絵はチベットの砂曼荼羅やキリスト教のイースターのお祭りなど古くから世界各地にみられます。2009年発明された新しい砂絵マリスはアクリル絵の具で色をつけた砂をキャンバスに固定する技法です。その際色の濃さにより砂を10段階のサイズに分けることで、全盲の人でも目の見える人と一緒に絵画を鑑賞できるようになりました。

2012年からこの技法の砂絵で世界193+1の国旗を共同制作しています。全盲の人のことを考えるだけにとどまらず、その国の一人ひとりの幸せを願い砂を置く共同制作にはすでにのべ1万人が参加、150万粒の砂が置かれ、150万人分の幸せが願われました。

マリスの国旗共同制作の砂おきは、砂1粒を1人とみなし、他国の人々の幸せを願って置きます。やり方は参加者に10人を幸せにする10粒の砂のバックを手渡します。

キャンバスにアクリル絵具で描いた国旗の上に、メディウムという接着ジェルを塗り、ひと粒ずつマリスの砂を置いていきます。

砂粒を置く時は外国の人に家族同様の愛を込めて幸せを願います。コソは砂の形はいびつなので、ジグソーパズルの要領でうまく組み合わせ、砂の平らな部分を下にして固定します。国旗共同制作の会場では大勢のボランティアがエスコートするので、小さな子どもから大人まで誰でも参加できることが特徴です。

思う→行動。このプロジェクトは「見知らぬ国の人」という設定を設けています。これは不特定多数の幸せを願うことを可能にし、抽象的な世界平和という言葉の認識を具体化する方法です。見知らぬ国に住む人の「幸せ」を願うひと粒の砂を置くということは、その人自身が実際に世界平和の行動を一步踏み出すことになるのです。

砂おきに必要なのは、「Love&Peace」＝全ての人が家族以外の人や外国の人を、家族と同じように愛すること。そして世界中の人が自らが知りえていない抽象的な他者の幸せを願うと、戦争や差別も無くなり世界平和が実現するはずです。

国旗はデザインですが、現代アートのモチーフとしても充分価値のある題材です。国旗は各国の思いが込められた優秀なデザインが多くあります。その国旗が一定数量を超えて並ぶことは、「量が質に変わる」ため、美しい芸術的価値を持つのです。

MARIS Paintings



マリス宣言

2016 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) 亜鉛版 | 1100 × 1140(mm)
©Liku M. Takahashi

マリス宣言

〈マリス〉とは、全盲の人も含む、すべての人が味わえる絵画技法とその技法を用いた絵画のこと。〈マリス世界統一基準表〉により、色の明度 (濃さ) を 10 段階の砂の粗さで表現する。濃い色は粗い砂、薄い色は細い砂、となる。色相を絵画の上に塗布するハーブエッセンシャルオイルの香りで表現する。たとえば、オレンジ色はオレンジの香り。紫色はラベンダーの香り。緑色はセージの香り。
造形作家・高橋りくは、2009 年〈マリス〉考案、2010 年〔マリスアートプロジェクト〕を発足した。

- アートから世界の平和を -
世界中の盲学校の子どもたちや目の見えない人びとに、晴眼者と一緒にマリスの絵を楽しんでほしい、代表的な芸術である絵画というものを観る体験をしてほしいのです。
耳の聞こえない子が骨振動で音楽を楽しめるように、盲学校の子どもたち、目の見えない人びとが、指で絵を楽しむことができれば、すばらしい！
この世の中には容易にできないこともあるけれど、不可能だと思ってきたことを可能にする体験をとおして、アートで心を通わせることができれば、みんなが優しさを思い出します。それはきっと世界の平和に繋がるでしょう。

マリスの計画

ヨーゼフ・ボイス※ 1 (1921-1989) に影響を受け、" アートで理想の社会を作る " ことを目指します。
※ 1 ドイツの現代美術家・彫刻家・教育者・社会活動家。
1 世界の目の見えない人みんなに、絵を見せたい。その方法としてマリスの絵画技法※ 2 を役立てる。

※ 2 マリス世界統一基準表は、音楽の五線譜のように世界共通。
2 世界中の盲学校に、マリス絵画を回覧する。
3 まず、先進国からスタート。先進国における初等教育の美術教科書・カリキュラムにマリスを導入し、混ざり合う社会への理解を幼少期から育む。対象は、目の見えない子どもたちと目の見える子どもたちすべて。
4 初等教育の学習指導要領カリキュラムにマリスが採用された国々に、マリスの教材製造工場をつくり、視覚障がい者を含め、多様なジャンルでハンディをもつ障がい者のために、雇用の場を創出する。

5 各国少なくとも 1 ヶ所に " 視覚障がい者のための灯台 " を建てる。45 歳以上の全盲の人たちを対象とする中高年ホーム※ 3 をつくることである (夫婦の場合、片方が全盲のカップルを含む)。それによって身体の高齢に伴う、本人と家族の負担と不安を取り除き、実り豊かな社会生活を営む人権を守る。
※ 3 例として、日本には、本間昭雄氏 (社会福祉法人 日本盲人福祉委員会会長) が推進した各県 1 ヶ所の全盲の人のハンディに配慮した老人ホームがある。
全盲の人が安心して生活できる社会は、他の障がい者の人たちにも優しい社会になっていくでしょう。
人類全体が、ほんの少しずつでも、人に対する優しさを増していく時に、戦争も無くなり、空も山も海も本来の力を回復し、きっと自然と人間がもつ本来のすばらしさを復活できるに違いありません。

2015.5.7 アーティスト高橋りく



Energy of galaxy

2014 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | 53 × 45.5(cm)

©Liku M. Takahashi

5 枚の花びらの絵はライフワークとしていつも描いてきているモチーフ。両手を伸びやかに広げた人として表現しています。

いつも前に出る人、真ん中にいる人、後ろにそっといる人、性格により人はさまざま。すべての人が気持ちよく、自由に生き生きとする社会をイメージ化しました。



change the world

2013 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | 193 × 103(cm)

©Liku M. Takahashi



福島 の 3.11 の後、8 月から描きはじめ完成まで 3 年を要した作品です。レクイエムと未来に向かう人類への勇気を込めました。

福島 の南相馬市から見た福島第一原発をバックに降り立つモナリザの等身。このモナリザが持つのは、暗闇の中に道を指し示す視覚障がい者用の白杖です。

「以前見た絵をもう一度見たい。」と、ある視覚障がい者の方が言われたのをきっかけに、中途失明の方なら誰でも一度は写真で見たことのあるモナリザを描こうと思いました。その構想を練っている間に 3.11 が起こり、描き始めるうちにどんどん自然にアレンジを加え、自分のモナリザ像になっていきました。不安定な原画のモナリザのバックが、どうしても福島第一原発に重なって私には見えてきたからです。



フラワーオブライフ - 宇宙への扉 - the door of univers vol.2

2012 | 水晶 星砂 アクリル絵の具 | 53 × 45.5(cm)

©Liku M. Takahashi

※この絵の砂の粒子は マリスルールにのっとして使用していないためマリスではありません。



フラワーオブライフ - 宇宙への扉 - The door of univers vol.1

2012 | 水晶 星砂 アクリル絵の具 | 5.3 × 2.27(m)

©Liku M. Takahashi

※この絵の砂の粒子は マリスルールにのっとして使用していないためマリスではありません。

フラワーオブライフは、レオナルド・ダ・ヴィンチも研究しており、彼の描いたメモ書きも残っている有名な神聖幾何学の図形の1つです。超古代文明から伝わり、あらゆるものすべてを内包するとも言われます。

私はこの図形を、自ら受け取った宇宙の波動のイメージにのせて描きました。

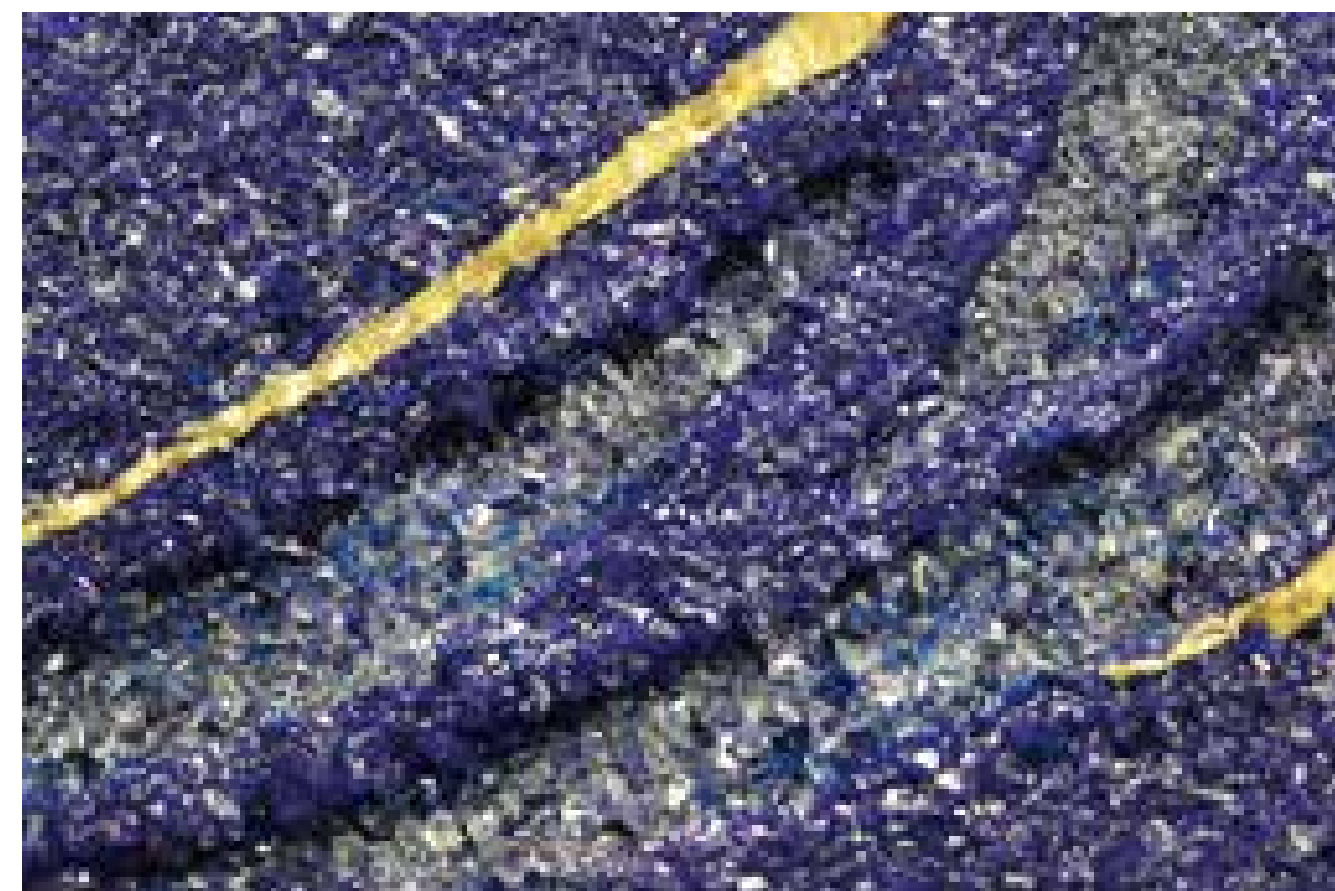
絵の中で深い青と金の出す色のエネルギーは、フラワーオブライフの力をより一層高めます。また、見る側の感覚にゆだねられる渦は、エネルギーを吸収、あるいは無条件に放出している宇宙の摂理を表しています。

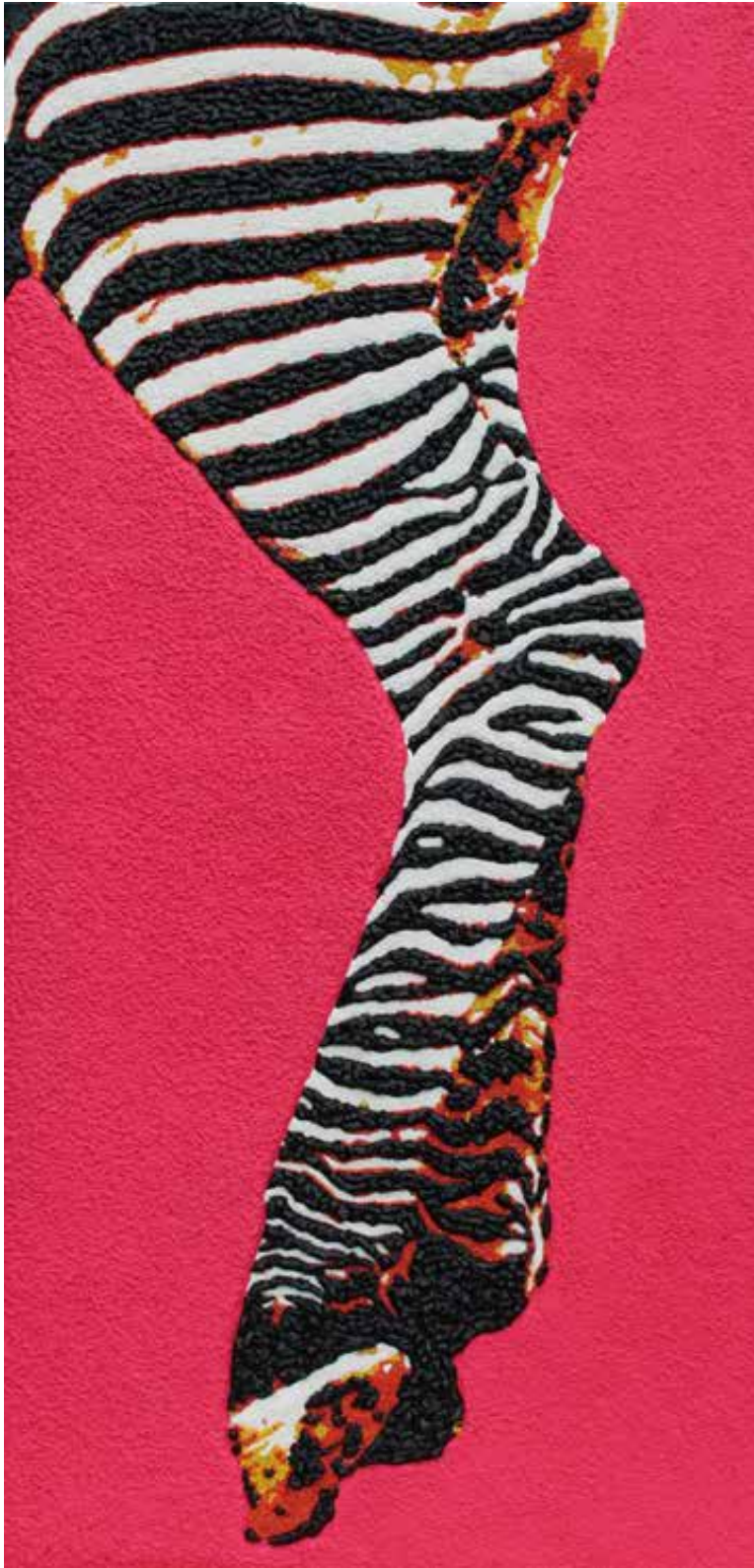
フラワーオブライフ自体、まだ見ぬ未来の扉でもあり、また始まりを示す象徴のように私は思います。

vol. 1の左から2番目と3番目の絵は、背景に大きさを変えた透明度の高い水晶を使用して、「目の見える人には明確に見えず、目の見えない人にははっきりと見える渦」を表現しました。

“見る”とはどのような事か？見る人により様々な解釈が生まれ、鑑賞者自身の姿を鏡に写し出す不思議な感覚を呼び起こすかもしれません。「地上に生きとし生けるもの、もちろん己自身もまた、この世の全ての一部として存在する。」そんな実感を持っている人も数多くいると思います。

おそらく地球で唯一宇宙の存在を認識する知的生命体の人間の役割は、時として良い意味でも悪い意味でも、大きなことの起こる原因となるはずです。そして宇宙における地球の存在自体も深い意味のあるものでしょう。





素敵なジュディ I

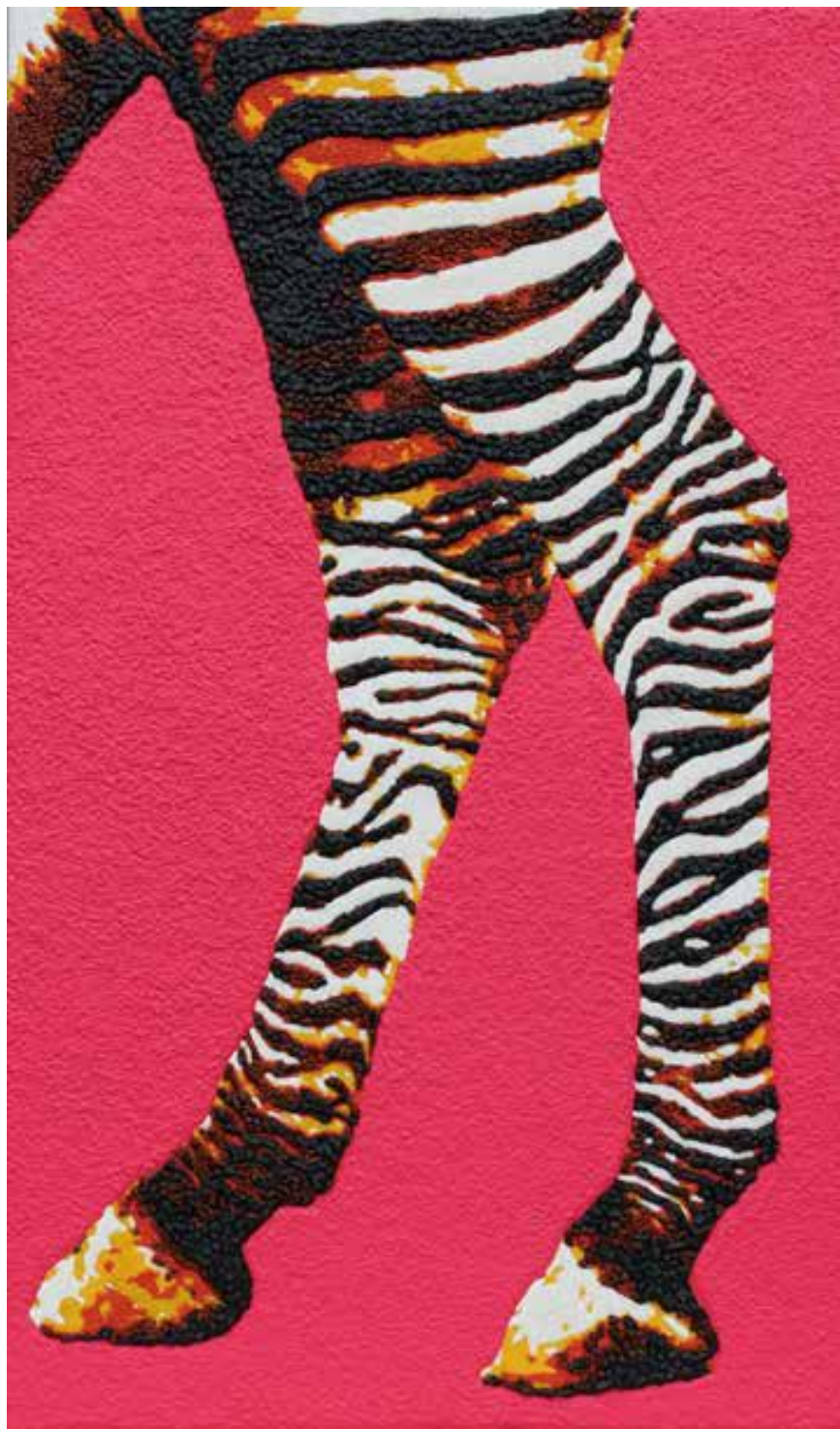
2012 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | 72.5 × 35.3(cm)
©Liku M. Takahashi

この足は、富山のファミリーパークにいる
絶滅危惧種のシマウマの雌です。

ちょっとセクシーな女の子のジュディは、横
縞の美しい毛皮ではありません。

シマウマたちには、群のルールや親子のつな
がり、いろんな関係があるようです。いろんな
動物園の取材に行くと、仲間にいじめられてい
るのか、ところどころ毛の抜けているやせたシ
マウマや、幸せそうにのんびり仲のよい親子に
も出会いました。

言葉で「シマウマ」と処理して頭のファイル
に整理してしまう前に、アフリカの草原にいて
も動物園の中にも、命ある存在として神聖
に生きている一匹の美しい柄のシマウマを制
作しました。



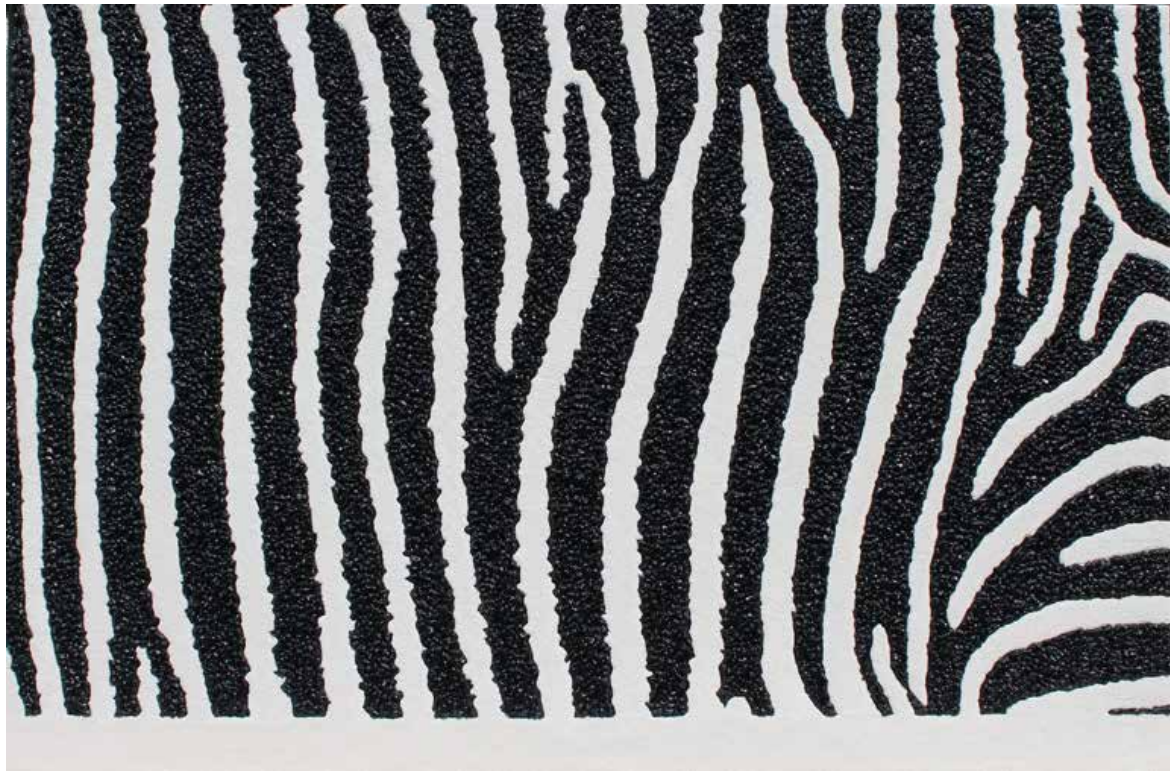
素敵なジュディ II

2012 | マリス技法（砂 アクリル絵の具 メディウム）| 72.5 × 42.9(cm)
©Liku M. Takahashi

大人の多くは、モノをみるときに、見ているつもりになっているだけで、ほんの一部しか見ていないのに、全てわかった気になっていることが如何に多いことか、と、動物園に行く度に、私は目からうろこを落としてもらっている気がします。

シマウマの足が横縞であることをご存知ですか？

私は今まであまり気にとめてきませんでした。あらためて、横縞のこの美しさに心をうばわれてしまいました。



ライオンには保護色

2012 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | M30 60 × 90(cm)

©Liku M. Takahashi

ある本を読んでいたとき、シマウマの縞は、色盲のライオンには草と見分けがつかないと書いてありました。

そういえば、盲導犬も信号機の赤と青が見分けられませんし、眼球の仕組みなのだとことを思い出しました。

こんなに堂々と保護色を使いこなしているシマウマにエールを。



日本のカモメのジョナサン

2012 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | 103 × 72(cm)

©Liku M. Takahashi

3.11 の震災直後の4月に描いたアクリル画のクロッキーの中の一枚をマリスに大きく書き直しました。

この絵は全盲の方にいつも手にしている白杖を傍らにおいて、カモメの大きな翼のように両手を広げ、触って頂きたいと思ったからです。

日本の空と海を上下の赤いストライプで表し、その中をカモメのジョナサンは翼を広げて自由に飛んでいきます。

ジョナサン・リビングストーンは仲間のカモメたちに聞きます。

「もっと早く、もっと高く飛べるようになりたいかないかい？もっと工夫したら、きっとできるようになるよ。」

ボロボロの翼になりながらも、ジョナサンの心と体は空高く、どのカモメも達したことのない高さへ上昇していきます。

“Are you Johnasan Livingstone?”

“Sure.”

“Yes!”



九頭龍^{そら}の宇宙

2010 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | 138 × 130.5(cm)

©Liku M. Takahashi

棋譜監修 有村比呂司 (財団法人 日本棋院 棋士)

アドバイザー 成島奈津子 (囲碁インストラクター)

白竜: 白の勢力圏。鼻先の一子を
気にかけている

白竜: 右上の白石の一段を表現。
黒の勢力圏で安泰し、してやった
の満足顔

青竜: 緑龍と共に上辺を盛り上げ
ている黒の勢力。持っている黒石
は、中央の黒と呼応して、これか
らの戦いに大いに役立つ

緑竜: 背中で白に大きく生きられ
ながらも、それを一応封鎖してい
る黒の勢力を表現

金竜: 掴んでいる大きな石は、127
手目の『耳赤の一手』。ここから始
まる中央での戦いを予言、局面は
大きく展開する。本因坊秀策の名
を囲碁史に残した不朽の妙手

火竜: 足で蹴るように掴んでいる
石は戦いの手筋だったものの、十
分な成果を上げられず辺の低位に
追いやられて少しもどかしい様子

白竜: この後の142手目(尻尾で
くるんだ5の十八)から始まる戦
いの舞を示している

土竜: 黒と白の両方を示している。
下辺から中央にかけての競り合い
を表現。啜えている石の周囲で戦
いが続き黒が苦戦を強いられてい
る最中、金龍の掴んでいる石が援
軍になって光明が見えてきた瞬間

白竜: 右下隅の黒石の一段を表現。
窮屈で悔しい様子

この絵は囲碁史に残る妙手「耳赤の一手」
を題材にして描かれています。

囲碁は、盤上が天空に、黒と白の石が星に見
立てられます。数々の星たちが行き交い、息づ
かいする様は人の世に似て古今多くの囲碁人
を魅了してやみません。時には囲碁史に残る妙
手も生まれ、それらは盤上の芸術と評されてい
ます。

九頭龍は新しい世界が始まる時に顕現する
といわれます。中央の天元には水晶の半球が配
され、そのなかに新な宇宙を表すかのように星
ぼしが目映く輝いています。

天空にうごめく龍たち。右下隅の龍は打ちひ
しがれた姿。何気なく見えた光明が中央の龍
によって、今まさに盤全体に輝こうとしていま
す。天賦の才が強い意志を持った龍となって現
れた瞬間です。

この龍こそ時を超えて、若き日の本因坊秀策
の姿を彷彿とさせます。

この龍は幾多の苦境をはね退け、凜としてい
ます。調和のとれた威圧感はずでに名人の風格
が備わった姿でした。相手は動揺し、その耳が
赤くなったと伝わっています。耳赤の一手を境
に形勢は不明から徐々に黒に傾きました。

九頭龍の宇宙

壮大な広がりと
神秘的な美しさを持った絵

一目見た瞬間、圧倒的な存在感に心を打たれました。アートはパッと見て感じとるものですね。囲碁にも共通するところがあります。碁と言うと、とにかく「読む」ことだけが強調されがちですが、じつは、まず直感でとらえて、それから読み解きます。ですから、やはり感性が大切です。

この絵にはみごとな「大宇宙」が描かれていると思いました。しかも秀策の碁を九頭龍で表現する、そのアイディアと言いますか、着想に感心しました。壮大な広がりと神秘的な美しさを持った絵なのですね。

このような芸術の存在が、これまでなんとなく疎遠だった方や海外の方にとっても、囲碁の世界に近づきやすくするのではないかと期待を抱かせてくれます。これまでの長い囲碁の文化史でも、おそらく類のない試みでしょう。本当に素晴らしいと思います。

武宮 正樹（財団法人 日本棋院 棋士九段）

この絵は囲碁史に残る妙手「耳赤の一手」を題材にして描かれています。

囲碁は、盤上が天空に、黒と白の石が星に見立てられます。数々の星たちが行き交い、息づかいする様は、人の世に似て古今多くの囲碁人を魅了してやみません。時には囲碁史に残る妙手も生まれ、それらは盤上の芸術と称されています。

天空にうごめく龍たち。右下隅の龍は打ちひしがれた姿。なにげなく見えた光明が、中央の龍によって今まさに盤全体に輝こうとしています。天賦の才が強い意志を持った龍となって現れた瞬間です。この龍こそ時を超えて、若き日の本因坊秀策の姿を彷彿とさせます。この龍は幾多の苦境をはねのけ、凜としています。

調和の取れた威圧感はずでに名人の風格が備わった姿でした。相手は動揺し、その耳が赤くなったと伝わっています。耳赤の一手を境に形勢は不明から、徐々に傾きました。

村瀬 利行（囲碁評論家）



2010年の5月、個展のためNYに滞在していた高橋さんから、私にメールが届きました。今回の作品を模索する最中「囲碁とは絵を描くように打っていくものですよ。」と私が以前お話ししたのを思い出し、その言葉から稲妻に打たれたような感覚を受けたというのです。そして「囲碁の棋譜をイメージ絵をマリスで描きたい」とおっしゃるので、本因坊秀策の『耳赤の一手』をお勧めしたのでした。

高橋さんは、私が以前紹介した友人の成島さん（囲碁インストラクター）からアドバイスを受け、『耳赤の一手』となる127手目までの棋譜と最終棋譜の資料を手に、それからは毎日数時間その二つをただひたすら見つめるのみ。一ヶ月後、夜空を何気なく仰いでいると、棋譜が五頭の龍に見立てられることに気づき、すぐさま木火土金水の龍で127手目まで、さらにはその未来までも含めて龍の姿の原案図を描くことに。成島さんに確認をお願いし、「他にも四頭の白竜が四隅にいるような気がする」と話すと、今度は彼女がその四頭を原案図に加える手助けをされたとか。その後二人で並々ならぬ努力を重ね、九頭の龍の姿をひとつひとつ丁寧に解釈・解明し、磨きをかけて完成させたのがこの作品です。

成人後に視力を失ってから囲碁を覚えた私にとって、この作品の誕生に立ち会えたことは、望外の喜びと言えましょう。

柿島光晴（NPO 法人日本福祉囲碁協会）



不思議の国のアリス Alice in wonderland

2010 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | 90 × 65(cm)
©Liku M. Takahashi

現在、過去、未来をあらわすそれぞれ3つの部分を重ね合わせて1枚にしました。

現在は、白い花が雪のように舞い降りる様子。過去は、青色を背景に中央に位置する大きな1つの花。未来は、現在と過去から見ることのできる過去の花の内側。

中央奥に見える光に包まれた部分です黄色を背景に、オレンジ、緑、青色の花の4色で描かれています。

過去、現在、未来の時間軸は一直線で並んでいますから、過去の2つの分岐点で必ず今現在に至る選択をしてきたはずです。そして現在は、水たまりを右か左によけるべきか、という些細なことから、仕事を変えるか続けるかほどの大きな問題も、そして身に起こったものごとの受け取り方常に2つの選択肢があります。

たぶん人が大きな宇宙の法則に気がついたとき、人間として真理のもとに、自分の正しい判断に従って行動することの連続を選ぶようになり、誰もが輝く約束された運命の未来に辿りつけるのではないかと私は思います。



線路はつづくよ（rainbow series）

2010 | マリス技法（砂 アクリル絵の具 メディウム）| M30 60 × 90(cm)

©Liku M. Takahashi

「わからない、って何？」と同じ左側の白い花には印刷の英語の文字が、右側の白い花には英点字が書いてあります。

ーパーキンス盲学校の特別授業での子供たちへの絵の解説よりー

「わからない」ことはたくさんある。その答えが永遠に人類の歴史を作っていくんだよ。ずっと続いていく線路のように。わからないことへの探究こそが「人間というもの」かもしれない。ほんの少しずつわかっていけばいいんじゃない？電車の線路を作っていくように。

2010 年 7 月 1 日、パーキンス盲学校本校 (U.S.A. ボストン) 所蔵・常設展示。



わからないって何？（rainbow series）

2010 | マリス技法（砂 アクリル絵の具 メディウム）| M30 60 × 90(cm)
©Liku M. Takahashi



左側の白い花の中には英語の文字、右側には英点字が書いてあります。点字の通訳者以外、通常は1つの花の文字は読むことはできても、別の花の文字は読めません。

「わかる。」とは何だろう？
「わかる」の意味はそれぞれひとにより幅広く解釈に個人差がでます。しかし、逆に「わからないこと」を考えると「わかる」の答えも出やすいのでは。

ひとりの人間が生きている間にわかっていることなど、ほんの僅かしかありません。
そして、「わからないこと存在に気づくこと」にこそ実は大きな価値があり、また希望もあるのではないのでしょうか？



ストライプの海の泳ぎ方

2010 | マリス技法（砂 アクリル絵の具 メディウム）| M30 60 × 90(cm)
©Liku M. Takahashi

みんなで海に遊びにきました。

どんなフォームで泳いでも今日は誰も文句は言いません。もちろんいつものプールではありません。笛を片手に怖い顔した水泳教室のいつもの先生が睨んでなんかいないから。

あなたのストライプの海はどこ？さあ、ストライプの海と一緒に泳ぎに行こうよ。

ストライプはあなたの作った心のルール。あなたのルールで行こう、気がつくと仲間も同じルールだった。そのルールは天まで続くルールでありたい。



chocolate mint ice cream

2010 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | M30 90 × 60(cm)
©Liku M. Takahashi

ミントチョコレートのアイスクリームシリーズの1つ。

アイスクリームは大切な幸せのアイテム。
楽しいときに食べるもの、いろいろな思い出と一緒に味がする。



雨上がりの花たち（rainbow series）

2009 | マリス技法（砂 アクリル絵の具 メディウム）| M30 × 260 × 90(cm)

©Liku M. Takahashi

小鳥たちのさえずりが、突然降ってきたスコールのあがったことを知らせます。

草も木も花も生き生きとよみがえり、みんな得意そうに丸い雨滴をのせています。

恵みの雨の恩恵をうけ、地上のすべてがキラキラと輝きはじめ、ふと青い空を見上げると、くっきりと大きな虹がかかっていました。

そう、世界が美しかったことを私はすっかり忘れていたのです。

[2010 年 2 月 9 日、日本点字図書館所蔵・常設展示]

Rainbow series

2009 年 7 月のニューヨークでの個展の原画をマリスにした 3 シリーズのひとつ。

いつか世界の主な美術館にマリスの別室ができ、目の見えない子も目の見える子も共に、芸術の美を鑑賞する光景が見られれば素敵です。



mint (country road series)

2009 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | M30 × 2 60 × 90(cm)

©Liku M. Takahashi

NY のセントラルパークの木々を吹き抜ける
初夏のイメージ。

作品を制作中、描き上がりの全体感を見ようと
して、このミントのシリーズ全部を窓に並べた
ところ、ミントの香りが風にのって漂ってくる
気がしました。

共感覚というらしいのですがその事が直接
のきっかけとなり、マリスを考案した経緯の意
味深いシリーズ。

Country road series

2009 年 7 月の NY の個展で「雨上がりの花
たち」と共にアクリル画で出展した「Mint」
と「Cherry Blossom」の両シリーズ。

世界不況の発信地である NY での個展という
ことで、「故郷を離れ大都会で頑張っているひ
とたちへ、応援のエールを送る」そんな意味を
込めました。

帰国後すぐに NY で発表した絵をすべてマ
リスで描き変えた、世界初のマリスの絵画、初
期の 3 シリーズ (他 Rainbow,Cherry Blossom)
のうちの 1 つ。



cherry blossom (country road series)

2009 | マリス技法 (砂 アクリル絵の具 メディウム) | M30 × 260 × 90(cm)
©Liku M. Takahashi



日本の桜の花のイメージで春を表したシリーズ。

青色とピンクの色を大胆に組み合わせていった独特のカラーリング。

1年前の春の構想を翌年の桜の季節を待ち、やっと形にできました。NY に日本の香りを持ち込みたいという思いから描いたものです。

Solid Works



エヴァを閉じると、内部の椅子に座った鑑賞者の眼前に現れるエヴァの目

EVA 降臨

2008 | GFRP 鉄 心音計 400W ベースアンプ他 音響機材 | 3.6 × 3.6 × 4.0(m)
©Liku M. Takahashi

アニメーションのエヴァンゲリオン初号機の頭部に乗ります。

人は逃げたいときに皆、「自分は力がないから、そんなのできるはずがない。」といいます。

もしあなたが巨大ロボットを操縦席から自在に動かしていたら、あなたはなんでもできるはずです。もちろん、他人からは力を持った人間と映ります。

しかし、実際にコクピットに座りエヴァを閉じると、真っ暗闇の中に閉じ込められ、逃げ場をなくしたあなたを、巨大なエヴァのオレンジの両目が見据えてきます。

そして自身の心音が聞こえてきます。

エヴァは使徒のように問いかけます。あなた自身の潜在的思考の奥底までも。エヴァンゲリオンに乗ってみたい人間だけが味わうことのできる自己との対話。

「逃げちゃダメだ」

すると、あなたとシンクロしたエヴァが動き出します。

仕様：操縦席に坐った人の心臓の鼓動が、400Wのベースアンプから響きわたり、銀座1丁目の1つのビル丸ごとを振動させます。

※この作品はガイナックスよりコクピットの位置を変更する許可をとっています。

copyright khara inc.





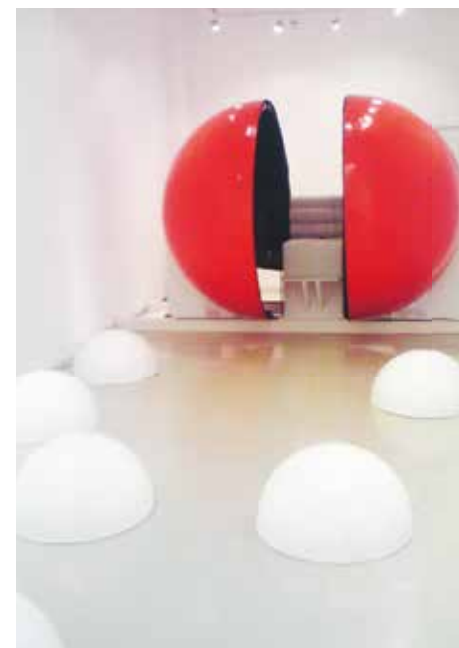
FRP でできた赤い球体の表面には数千の穴があいています。鑑賞者が球の中に入ると、足元から頭上、背中までぐると小さな穴から入る外光により点在するまばゆくばかりの星々に囲まれ、ある種の浮遊感を体感できます。

白い中央のイスのうしろには、400W のスピーカーが配置されており、イスに座った人は、イスに備え付けられた心音計のクリップを耳にはさむと、背後の巨大スピーカーから、ドクンドクンと自身の心臓の脈打つリズムが、赤い球体はもちろんギャラリー全体に重低音で響き渡ります。

赤い球体は1つの惑星であり鑑賞者自身。その惑星の中に入ると、その人自身をとりまく数えきれない星々。そして、その人の心臓の鼓動が天球をふるわせ、ギャラリーの床、天井、かべ、その建物までを突き抜けビルごと共振させます。

この世の中すべては自分があるからこそ、この世界は存在している。

我思う故に我有り、すなわち天動説。



天動説 - がんばれ日本 -

2008 | GFRP 鉄 心音計 400W ベースアンプ他 音響機材 | 2.5 × 3.5 × 1.8(m)

©Liku M. Takahashi



太陽の椅子

2007 | 心音計 音響機材 ベニヤ板 ナイロン生地 スポンジ | 1.2 × 1.8 × 0.9(m)
©Liku M. Takahashi

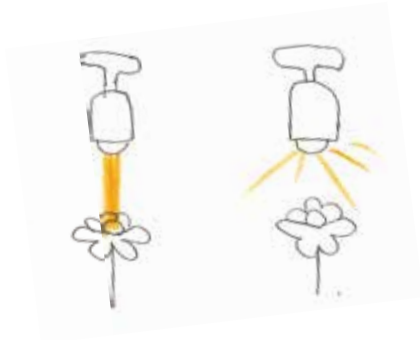
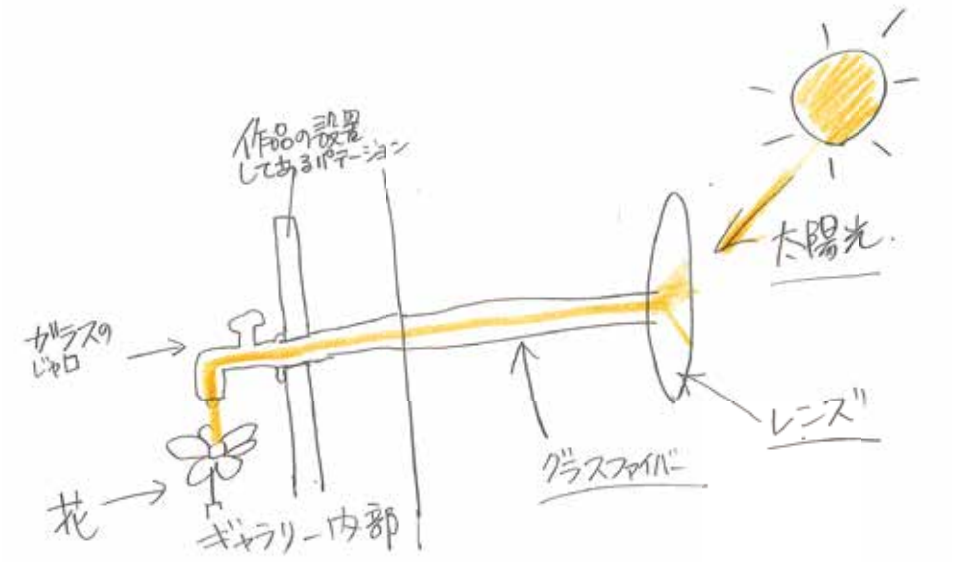


白い角ばった立方体のイスの中には、心音計と重低音を響かせるスピーカーを内蔵しました。

鑑賞者がイスに沈み込むように座り、心音計の計測部分のクリップを耳に付けると、その人自身の心臓の鼓動のリズムが、心音計からシンセサイザーを通りスピーカーで拡張されて響き渡ります。心音のリズムの震度は、鑑賞者の肉体とイスをひとつの物質に合体させます。そして、ギャラリー内部の床と壁と天井も共鳴により合体し、ビル丸ごとが鑑賞者と震度による同一化をします。

タイトルの太陽とは、個々人自身のこと。すべては本人の意識があるからこそ、その人にとってこの世界は存在し、太陽があるから太陽系も、地球も大地も、地上の生きとし生けるものも存在します。

そのことを知るのも、気づくのも心の目を開くから見えることです。



外に設置したレンズから、太陽光をガラスファイバーでギャラリー内に導き、ガラス製の蛇口の下に設置してある花に届けます。

1つの蛇口から流れ出る2種類の光のシャワー。一方の蛇口からの光は直線的に花にあたり、もう一方は分散して花に少しの光しか届かない構造です。

ガラス製の蛇口の中に、ガラスファイバーの束を通し、その蛇口の先端部分に水滴のように見える透明水晶の半球をはめ込み、ガラスファイバーと半球の平らな部分をきっちりジョイントさせると構造上、半球のトップから直線の光が出ます。きっちりジョイントさせてないと、直線ではなく分散した形で蛇口から光が出ます。

地上の花に今まで通りさんと太陽がそそぐためには、人類1人1人のchoiceが必要です。[2045]とは「このままいけば、南極と北極の氷がすべて溶ける」と2007年春、ある学者が学会で警鐘を鳴らしニュースでも話題に取り上げられた年のことを指します。



choice 2045

2007 | ガラス 光ファイバー 花 水晶球 | 3.0 × 2.3 × 0.3(m)
©Liku M. Takahashi



月光浴・日光浴

2007 | マケット / ガラス | 150 × 50 × 25(m)

©Liku M. Takahashi

ローリングストーンズのマークの舌のようなエロティックな形の椅子がビーチにあったら、寝そべりながら何を考えようか？

大半の人は日光浴の時には太陽の光を避けて影が出来る側に座り、月光浴の時は月の光を存分に浴びられる椅子を選ばます。

その自然な行為とともに、地球環境を考えてもらえたらと考え作ったものです。

家族でもカップルでも一人でも海風や太陽や月を楽しみながら、海と自然と人間の関係にふと思いを巡らせてもらいたいです。



bloom field 地球にお灸しよう

2006 | マケット / ガラス 水晶 大理石 | 50 × 50(cm)

©Liku M. Takahashi



中央に設置したガラス製のボウル型の中には5枚の色付きレンズが入っています。

太陽光がこれらのレンズを通り、その焦点が地球のコアに向かう想定で構成しました。コンセプトは"地球が元気になるようにお灸をしよう"です。

中国の風水から導いた場所に、お灸をすえるように必要な数のこの作品を配置したい、と思っています。太陽光が、中国の五行思想でいう五つの要素の意味を持つ木火土金水の色を配した5枚のレンズを通り、その焦点が地球のコアに向かって設置するならば、人間が弱らせてしまった地球を少しでも元気づけられるかも、と私のロマンを作ってみました。

周囲を取り巻く五つの家は龍のすみか。

木火土金水の五匹の龍が、正のエネルギーを取り込み、負のエネルギーを弾く意味を持たせ、中心のボウルを守っているイメージです。



天使の舞い降りる場所

2005 | ガラス 水晶 大理石 ステンレス 鉄 | 7 × 7 × 2(m)

©Liku M. Takahashi

古代ギリシャの哲学者・エンペドクレスは、万物の根源は『四元素』であり、それらは水・空気（風）・火・土であるとしていました。

この西洋の"四元素説"に対し、よく比較されるのは、古代中国で春秋戦国時代に生まれた"五行思想"です。木火土金水の五つの要素により万物が成るという五行思想は、日本でも普段の生活の中に溶け込んでおり、知らぬ間に私も考え方の根底の部分で影響を受けてきました。改めて、日本では日常から馴染み深い五行思想を自分なりに組み込み、場を整えるイメージの作品を制作しました。

五行の運行の基本となる木火土金水の活動を活発化させて、膨大に降り注ぐ宇宙のエネルギーの一部を地球のコアに人間の力で届かせる物理的な装置をつくれば、人間が荒廃させている地球の表層を、人間の力で少しでも修復できる可能性もあり得る、というひとつのアプローチです。

それぞれの大理石の柱には、5色の色ガラスで出来た五つのピラミッドの頂点には水晶が配してあります。

太陽の光は、水晶を通して5色の柱の色ガラスの空間を通り抜け、大理石の柱の内部のT型のスチール管に当たり、一部は銅線で地下に導かれ、他は、光の分岐点にある反射板により分かれ左右の色ガラス窓から外に出ることになります。(3)

作品の中心側の窓から出る光は真ん中にある半球のガラスが設置してある五角形のサークルへたどり着きます。

そこは、中心の表面に円形の強化ガラスをはめ込み、人が座ることができます。座った鑑賞者の丹田には、五つの柱から発せられる5つの光が集まります。また強化ガラスの下には、紫とブルーの曼荼羅模様のある半球型のガラスの塊を設置。鑑賞者がそこに座り、通常その人自身を包むオーラを感じとうとする場合、地上の半円のイメージは得やすいですが、地下の半円のイメージはしにくいため、それを補うようにするため、ガラスの半球型を置きました。(1-2)

水晶とガラスの組成は同じケイ素で成り立つことに着目しました。

大理石の柱の頂点に配した水晶から波動を持つ底面 50cm × 50cm のガラスのピラミッド・・・このピラミッドは、水晶のエネルギーを増幅する装置の意味を持ちます。(2)

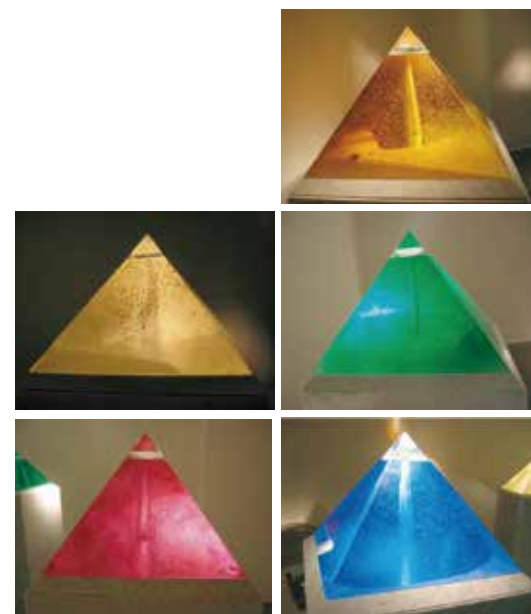
"天然の水晶の持つエネルギーをガラスがスピーカーの役割をして共鳴させられる"と自分で仮説を立て、トップの水晶と下のガラス部分を含める全ての形がひとつの水晶の塊のピラミッドとして機能する仕組みにしました。



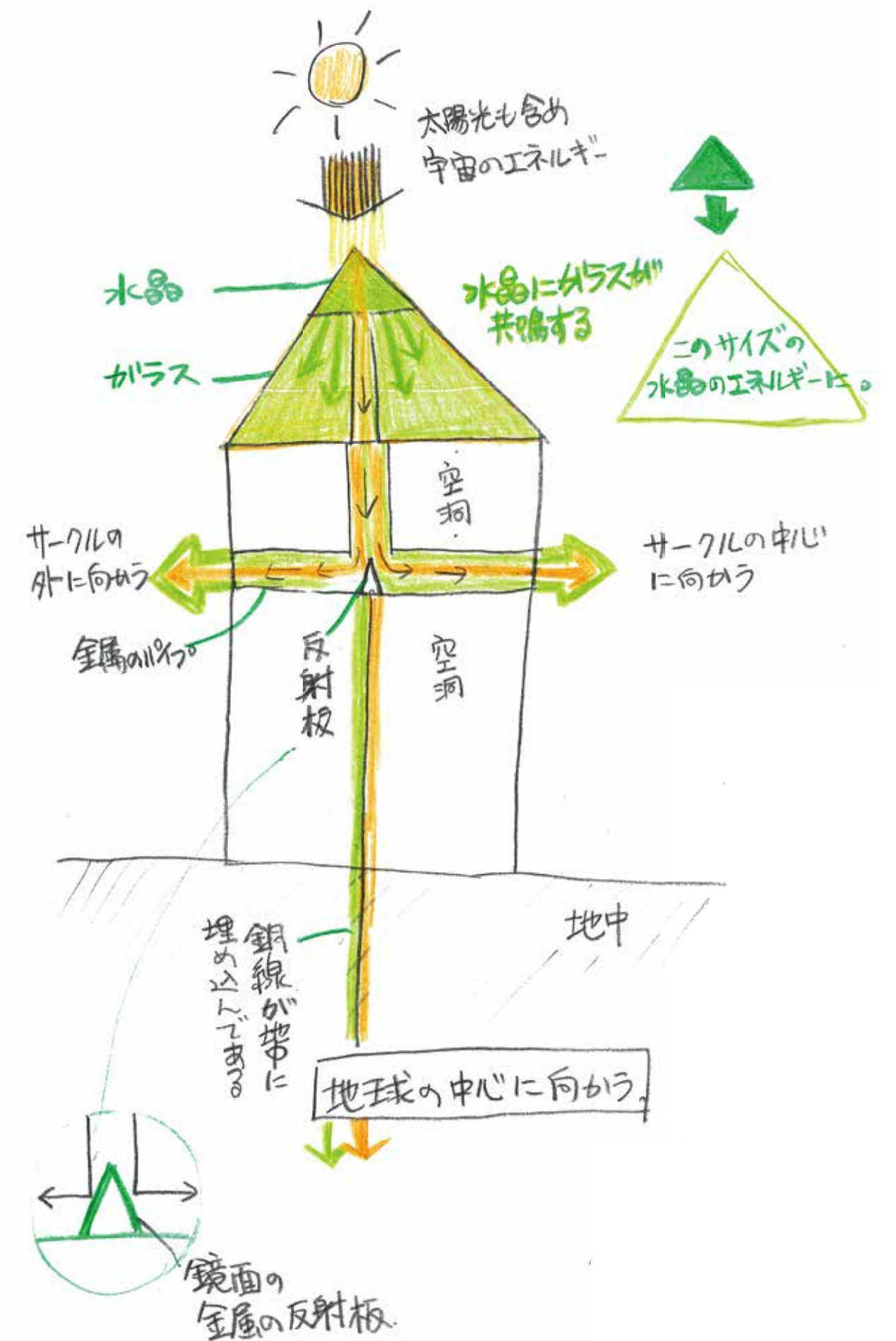
1-1



1-2
断面図
中央の五角形の中の下の
ガラスの半球の意味



2



3 断面図
ピラミッドの柱



何処へいくの？

1994 | マケット / ガラス 感光乳剤 鉄 | 0.5 × 0.5(m)

©Liku M. Takahashi

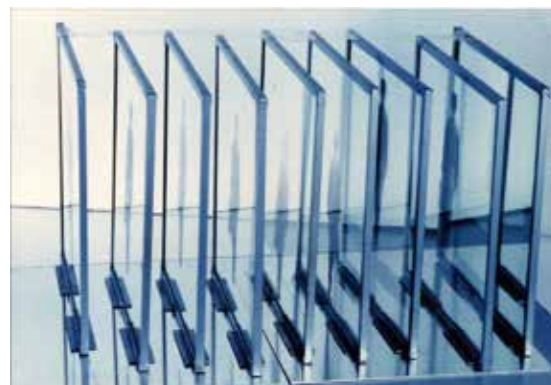


パラレルワールドは12次元に分かれているという説もあります。12枚のガラス板に同じ写真を位置を変えて、フォトエマルジョンでプリントしました。

毎回の仕事を自分なりに一生懸命こなし、きちんとした社会の一員になっているサラリーマン。自分の未来はこのままだこにつながっているのか。ふと考えてはすぐにきちんと自分を折りたたみます。

もしかしたらそんな生活の中に、誰も教えてくれない、自分でも知らない異次元の自身の価値が存在しているのかもしれませんが。そしてサラリーマンは異次元空間を軽やかに跳びながら歩いていきます。

この次元の当の本人は異次元の自分の価値に気付いていないのだから、ただ黙々と冷たい風に吹かれてコートの襟を立てながら、いつものこの道を歩いているのだけれど。





都会のラビリンス

1994 | マケット / ガラス 木 鉄 | 0.5 × 0.5(m)

©Liku M. Takahashi

このガラス板とステンレスと空き缶で作られたラビリンスは、入り口から入る時は、目標である出口も、その奥にある木もみえているのですが、中に入り込んでしまうと、その人の出口への方向感覚の本能しか頼るものではありません。

その出口は、入り口からまっすぐの正面には何枚かのガラスで遮られていて、初めは見た記憶が残っています。

カラフルな空き缶で彩られたカベは、見ているうちに無機質な都会の残骸のように思えてきます。ときどき迷路の中にある鏡面のドアは、ドアノブがないので押して入ることができても、再びもとの道に戻ることはできません。

ドアに映る自分の姿は一面のカベの中に埋もれて見えます。

都会で生活することは、まるで迷路の中に入り込んでいるように私には思われます。

このガラス板とステンレスと空き缶で作られたラビリンスは、入り口を入る時、目標である出口も、その奥にある木もみえているのですが、いったん中に入ってみると目の前にも横にもカベがあります。

地面と前や側面の壁しかない中、疲れて困り果てた末、ふと顔を上げると、切り抜いたように長方形の青い空があります。

何度か、もしかしたらと、淡い期待を持ち、上を見ながら歩き続けると、いつしか目の端に出口の方向を指し示す大木の上部がときどきちらりと見えるようになります。

上をみながら迷路を行くと失いかけた方向感覚もよみがえってきます。





エーテル

1993 | ワイン瓶 コルク 鉄 | 1 × 1 × 2(m)
©Liku M. Takahashi



「醸造用ラック」に模した赤い棚には、[エーテル] 入りのワインボトルが入っています。

ボトルの透明ラベルに、各人の西暦の生まれ年、笑顔の写真、made by cosmo を2本ずつセットでプリント。ラックの表と裏面で一対にそれぞれ100人分のボトルが並んでいます。

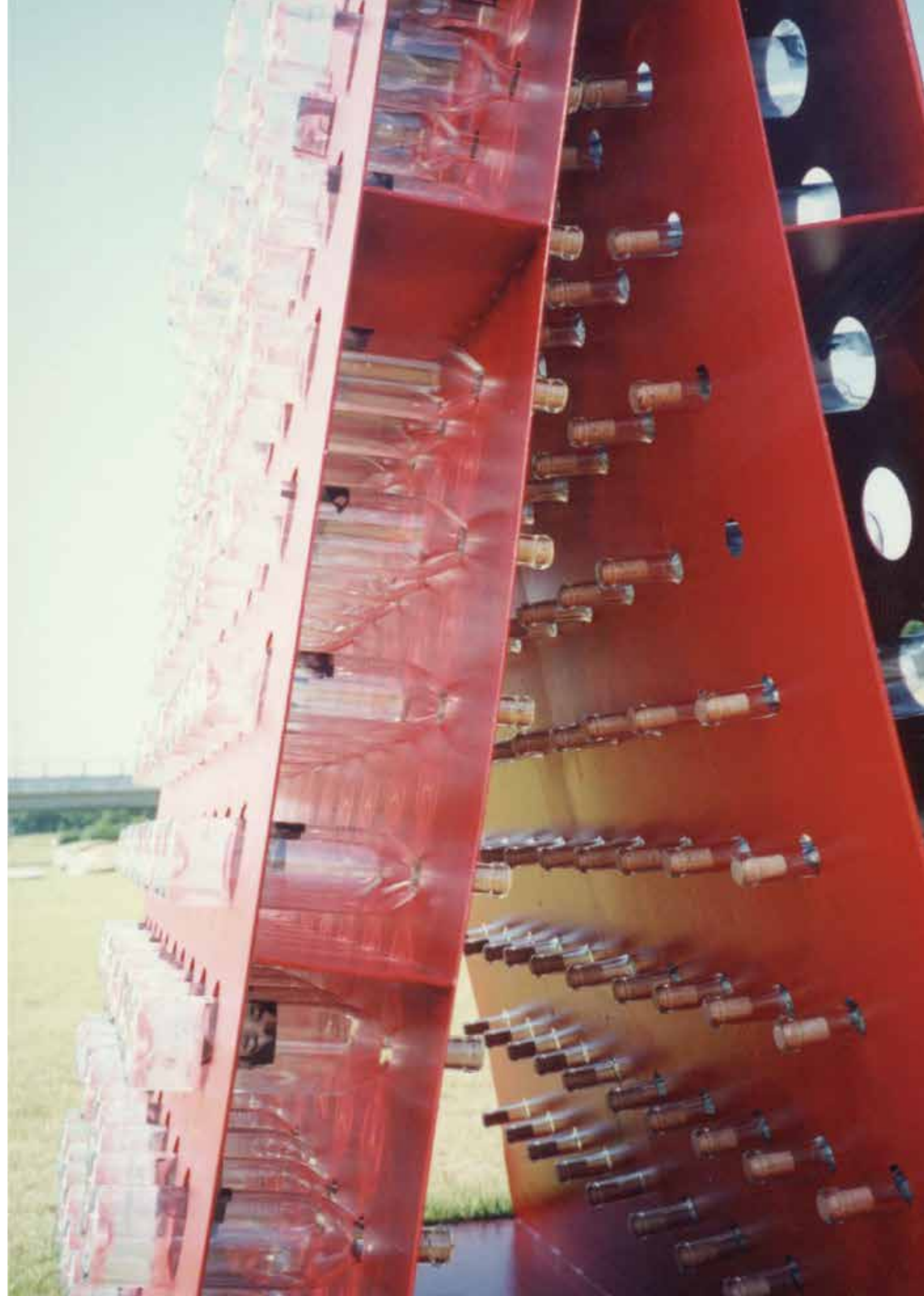
ひとは、表面にある現在の世界だけでなく、裏に別のパラレルワールドにも同時に存在しているのではないのでしょうか。1つの存在がその場だけにとどまらないのは思考だけで、別の次元にも宇宙にも意識を飛ばせるから。寝ているときでさえも自分の存在はどこか別の世界へとまぎれこんでいるかもしれません。

そんな人間という生き物の身体を所持する我々は、何故この世界に生きて存在しているのか。それは、[学ぶため]そして、学んだことを忘れないように魂にしっかりと刻んでいかないといけないからでしょうか。

それには魂を醸造させる必要があります。魂は時間も空間をも越えます。

人として、その魂の器であるボディを得たときにのみ数十年数百年ずっと長いあいだ待ち望んできた「学びの時」を得るのだと私は思います。そのときに限り魂は成長し、学びを刻みつけることができるのです。まるで醸造用のワインラックでワインが寝かされて、クオリティを高めるかのように。







祈り

1992 (卒業制作) | installation / ガラス | 0.5 × 0.8 × 0.5(m)

©Liku M. Takahashi



(1)



(2)

海辺でのインスタレーション。
(1) 老人の頭部と、合掌する肘から上の手の二つをガラスで鑄造。
(2) 粘土でつくった 21 個の頭蓋骨の形をガラスで鑄造。

人間は死ぬときに何を感じるのでしょうか。魂が肉体から解放される瞬間、今回の人生で体験した学びをエッセンスとして凝縮し、さいごに魂のメモリーに「学び」として刻みつける。私にはそんな気がします。

何度も転生している魂は、朝日を見る度に、新しく身体を得た瞬間の喜びを思い出し、夕日を見る度、死んでいく瞬間に走馬灯のように巡る一生の体験から導かれる「学び」の尊さを思い出すのかもしれませんが。

今もなお、日本の田舎では老人たちは毎日夕日に向かって合掌します。その姿は、自身の自覚を越えた魂そのものが、一般的には、ボディ（肉体）が減びて魂が出ていく「死」と言われる瞬間に、かすかな消えゆく記憶から最後に刻む走馬灯の如きメモリーの中に「すべてに感謝」の悟りを加える用意をしているかにも思われます。

チベットでは 49 日間ラマ教の僧侶が死者に祈りを捧げ、魂が「学び」のメモリーを刻み、次の段階に進む為の導きをしていきます。



for sale parts of my life! - 就職活動についての考察 -

1992 (卒業制作) | 冷蔵ケース 発泡ウレタン 鉄 | 1.5 × 2.0 × 1.8(m) ※御自由にお遊び下さいの注意書きあり
©Liku M. Takahashi

For Sale Parts of My Life = 自分の人生切り
売ります

ディスプレイ用冷蔵庫の中にある頭骸骨は、
同じ型からとってあるにも関わらず、どれも少
しずついびつです。

型取りした頭蓋骨を、制作当時工業用に開発
され一般にはあまりでまわっていなかった発
泡ウレタンで制作。型からの鑄造過程で時間や
室内温度の差の条件を変えることにより、型取
りした頭蓋骨は微妙にひとつひとつ違いを出
しました。

発泡ウレタン製のため、持つと実際の頭蓋骨
の表面を触るのとは明らかに異なり意外にも
やわらかく、人の皮膚と肉と骨を混ぜ合わせ、
体液が 30% 前後ほどイメージに近づけよう
としました。そのためこれらの頭蓋骨は通常の発
泡ウレタン鑄造より表面が厚めで、かなり硬め
にし、柔らかくもあるがある程度の硬さを維持
し、手で持った時に鑑賞者が今まで触ったこと
のない感覚、本来自然界にはない人工物ならで
は出せる新鮮な手触りの感触と重量感を持た
せました。

冷蔵庫の隣には、「御自由にお遊び下さい。」
の但し書きがあります。鑑賞者には、実際に
ケースから頭蓋骨を取り出し、手で触ったり
ボールのようにキャッチボールしてもらう意
図です。

お風呂屋さんの牛乳販売用でよく見かける
冷蔵機能付きショーケースのモーターを取り
除き使用。

学校を卒業するときの青二才は誰も似たよ
うなもの。就職して自分の好きな仕事を選べた
にせよ、思いとは違う仕事をするにせよ、必ず
その仕事には学びが潜んでいます。

いつかきっと実力をつけて、「あなたの思う
存分好きなようにやってください。」と言う言
葉をかけられるようになりたいものです。



父の肖像

1989 粘土

©Liku M. Takahashi

完結していなかった体感シリーズ

近年よく「グローバル○○」という言葉に出くわすようになった。経済関係のニュースに比較的頻繁にでてくるものだから、つい「世界的」とか「世界標準」と、納得してしまうけれども、もともと「global」という言葉は「球、球体」を意味する「globe」からでているので、「世界」よりも、「地球」をイメージして訳すほうがふさわしいらしい。

コンテンポラリーアーティスト・高橋りくの作品は、「太陽の椅子」(2007)以来、それ以前の「ムーンライト&サンライト」、「チョイス 2045」(ともに2007)などとは明らかに違って、視覚から入る美意識に訴えるものから、体感型とでも言うべきか、身体そのものに訴えるスタイルへと移行してきた。そのシリーズは、「天動説」へと続き、そのまま鑑賞者がエヴァンゲリオンのパイロットになれる「エヴァ降臨」(ともに2008)とまでなったのだから、このシリーズは完結したものばかり筆者は思っていた。

今回の「マリス」は、古くからある砂絵を進化させ、いくつかの基本色に限定し、色ごとに砂の粒子の大きさを規格化し、さらに各色に香りをつけるというもの。これらの規格を統一することにより、視覚障がい者にも鑑賞が可能になるよう考案されたものである。

これは、以前のシリーズがいまだに完結してはいなかったことを意味する。なぜなら、過去の立体体感型作品は、いうなれば視覚から体感への移行であり、「マリス」も触覚と嗅覚への移行と考えられるからである。さらにいえば、このシリーズは、視覚→体感→五感といった感覚の移行、変換、跳躍そのものが目的であるとも捉えることが可能である。このことは、おもに視覚のみに依存してきたアートから、五感すべてに訴求するアートへの移行、五感の解放という視点から考えるべきなのだろう。

高橋の今回の企画は、もちろんこの規格化によって他の作品の価値が減ることなどあり得ないのだが、アート作品の「地球標準化」を目指すと言っては、大げさにすぎるだろうか？

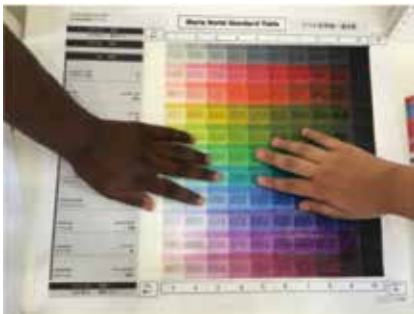
金田一 好平 (アトライター)
2010/01/19

高橋りく略歴

1993	東京造形大学彫刻科卒業。在学中、佐藤忠良氏に師事
7 歳 -	全日本なぎなた連盟 元理事長 吉田定子氏に師事
19-22 歳	小中高、なぎなた全国大会優勝 天道流薙刀 宗家 美田村武子氏に師事
1989-2008	現代美術立体作品を次々発表
2009.4	現代美術の表現の一つとして、人類すべての人が見える絵画技法を研究
2010.1	人類すべてが見える絵画 " マリス " を発明 マリスアートプロジェクト発足、マリスの代表及びプロデュース活動を開始
3	盲人文化史年表にマリス記載 (小原二三夫氏編纂)
4	パーキンス盲学校で特別講義 (Boston USA)
5	「マリス世界統一基準表 ©」 発表
2011	アート・スチューデント・リーグ・オブ・ニューヨーク 絵画留学 Charls B Hinman 氏に師事 (NY USA)
4.15-5.20	N.Y 7 つの美術館前でデコレートアクション
5.13	N.Y のタイムズ・ワーナーチャンネル アート番組 [NoriVision-creative art and culture tv]- Time Warner Cable に出演
2012.8	「マリス国旗プロジェクト」全国ツアー
2014	改訂版「マリス世界統一基準表 ©」 発表
11.6	東京都庁常設展示
11.22-24	IBSA ブラインドサッカー世界選手権 2014 併催イベント「新しい世界デイ」 出展 (東京)
2015.7	第 1 3 回オンキョー世界点字作文コンクールサポートの部 佳作 (2 位)
2016.1.29	一般社団法人日本ダイバーシティアート学会設立 代表理事就任
2.18	ベンジャミンコンスタン盲学校特別授業 (リオデジャネイロ・ブラジル)
3.3	パリ盲学校 (Institut National des Jeunes Aveugles) に資料、絵画提出
9.8-23	リオデジャネイロパラリンピック期間中アート企画マリス作品展開催 TV Brasil のタ方 news にて紹介。リオの O Globo の Rio Show に掲載
2017.11.7-10	WBU(世界盲人連合) 国際会議 - マリス作品展 (東京)
2018.11.1-9	マリス作品展 in ハノイがベトナム国営放送ハノイニュース 2 本 , 在ベトナム日本人向け日本語のラジオニュース 1 本 , ネットニュース 3 本で取り上げられる
2019.5.7	フランスの発明コンクール PARIS INTERNATIONAL CONCOURS LEPINE にてマリスが銀賞と特別賞受賞



Liku Maria Takahashi (高橋りく)
一般社団法人世界ダイバーシティアート学会 代表理事
マリスアートプロジェクト 代表
現代美術作家



マリス世界統一基準表 © (2014 改訂版)



WBU 国際会議 各国代表とマリス国旗



PARIS INTERNATIONAL CONCOURS LEPINE 銀賞と特別賞

マリス国旗プロジェクト (2019.5.20 現在)

2012.6.2	第 1 回	富山 (富山)
2012.8.18-19	第 2 回	旧小坂邸 (世田谷)
2012.12.16	第 3 回	筑波技術大学 (筑波)
2012.12.30-31	第 4 回	富山美術学院 (富山)
2013.1.2-4	第 5 回	富山美術学院 (富山)
2013.6.1-7.21	第 6 回	BankART Studio NYK (横浜 神奈川)
2013.8.1-11	第 7 回	ふれあいエスプ塩竈 (塩釜 宮城)
2013.8.5-10	第 8 回	GalleryQ (銀座 東京)
2013.8.10-18	第 9 回	国際障害者交流センター (ビッグアイ) (堺 大阪)
2013.8.24-29	第 10 回	富山美術学院 (富山)
2013.11.6-7	第 11 回	堺市立健康福祉プラザ (堺 大阪)
2013.12.22	第 12 回	視覚障害者生活情報センターぎふ (岐阜)
2014.7.6-21	第 13 回	ふれあいエスプ塩竈 (塩釜 宮城)
2014.7.23	第 14 回	筑波技術大学 (筑波)
2014.11.22-24	第 15 回	新しい世界デイ (IBSA ブラインドサッカー世界選手権 2014 併催イベント出展 (代々木 東京)
2014.11.29	第 16 回	国際視覚障害者援護協会 (東京都板橋区)
2015.3.30	第 17 回	越中騒動 (富山)
2015.6.19-28	第 18 回	BankART Studio NYK (横浜 神奈川)
2015.9.19.20.26.27	第 21 回	ふれあいエスプ塩釜 (宮城)
2015.10.4-12	第 22 回	江古田ユニバース 2015/ ターナーギャラリー (東京)
2016.6	第 23 回	世田谷美術館市民ギャラリー A(東京)
2016.9.8-23	第 24 回	ベンジャミンコンスタン盲学校 (ブラジル / リオデジャネイロ)
2017.6.28	第 25 回	塩竈市立第一小学校 (塩釜 宮城)
2017.7.1-9	第 26 回	塩竈市杉村惇美術館 / ふれあいエスプ塩竈 (塩釜 宮城)
2017.9.17	第 27 回	仙台国際センター (仙台 宮城)
2017.10.28	第 28 回	世田谷区立玉堤小学校 (世田谷 東京)
2017.11.7-10	第 29 回	世界盲人連合 (WBU) 国際会議 (早稲田 東京)
2017.11.19-23	第 30 回	ブラハコンGRESセンター / ブラハ盲学校 (ブラハ チェコ)
2018.5.31-6.21	第 31 回	Knihovna Petra Bezruče v Opavě(オパヴァ チェコ)
2018.9.16	第 32 回	仙台国際センター (仙台 宮城)
2018.10.19-25	第 33 回	Museo d'Arte Orientale(トリノ イタリア)
2018.11.5	第 34 回	塩竈市立第一小学校 (塩釜 宮城)
2018.11.23-12.9	第 35 回	サクラステーション (ハノイ ベトナム)
2019.2.14-17	第 36 回	Ho chi mihn Fine Arts Museum (ホーチミン ベトナム)
2019.4.22-25	第 37 回	AAA Paris (パリ フランス)
2019.4.27-5.8	第 38 回	PARIS INTERNATIONAL CONCOURS LEPINE (パリ フランス)
2019.5.14-23	第 39 回	Czech Embassy of Japan JICC(ブラハ チェコ)



第 7 回マリス国旗プロジェクト



第 15 回マリス国旗プロジェクト



第 24 回マリス国旗プロジェクト



第 25 回マリス国旗プロジェクト



第 33 回マリス国旗プロジェクト



第 35 回マリス国旗プロジェクト

全盲の人が絵をみる価値

現代アートで優しい社会づくり

政治や宗教ではなく美術だからできることがあります。日本で生まれたマリスは「思いやり」の教育啓蒙を世界に行っています。

1粒1粒祈りを込めた砂粒。世界中の人がマリス国旗を鑑賞・共同制作に関わる行為により、各人が世界平和と多様性に生きる社会づくりを考えるきっかけづくりを創造します。

絵画鑑賞の意義

一般的に、絵画鑑賞は目から伝達される刺激が脳に伝わり、そこから生まれる脳内物質の作用で心が豊かになり、幸せを感じるとされます。色彩が心に及ぼす影響は、色彩学の権威ヨハネス・イッテン(1888-1967)が、明るい色は心が明るく元気になり、暗い色は落ち着き冷静になる効果があると提唱しました。つまり心の豊かさを得る上で絵画鑑賞は1つの大きな手段なのです。

日本と世界の視覚障害者の現状

残念ながら、視覚障がい者が絵画鑑賞を必要としていることにアート業界や健常者が気づいていないことを、各国でワークショップ活動を通し実感しています。

現在、障がい者全般への支援は物質的なものが中心となっています。そこに文化・芸術という新しい支援の形を加えることで厚みのある支援をすることができます。物質的豊かさと精神的豊かさの両者が揃うことが人間本来の『真の豊かさ』なのです。

健常者に発信する意義

マリス世界国旗展は、視覚障がい者の人権の尊重を起点とし、そこから派生する「思いやり」の心を拡張、世界規模で広める土台となります。

視覚障がい者の声 (1) 世界最大の盲学校

パーキンスの理念 Without limit

これはヘレンケラー女史を輩出した、世界最大の規模の盲学校 Parkins School of the blind の理念です。

高橋りくは2009年にマリス技法を発明し、翌年パーキンス盲学校で特別講義を行いました。当時の校長は、「視覚障がい者にとって価値があるかの判断を子ども達に委ねましょう。」と、場を設け、講義には絵に興味のある中学生の17、18人が集まりました。

マリスの絵画は3点。彼らは順番に絵を1人1枚5分かけてゆっくり丁寧に鑑賞、行儀よく3列作り順番を待っていました。

はじめの3人の子がそれぞれ絵を指先で鑑賞しはじめると、彼らの顔が一気に喜びに満ちた表情に変わりました。「僕絵が見えるよ!」「この絵は線路の絵なんだね! マリアは日本から列車に乗ってきたの?」[線路は続くよ](現在パーキンス盲学校所蔵・ミュージアム常設展示)を見た生徒が声をあげました。

他の生徒たちも、「この花は緑ね! ペパーミントのお花。こっちは白い花なのね。私はこのお花の絵が3枚の絵の中で1番好きよ。だってお花がいっぱいの絵なんですもの。」

マリスの絵画の鑑賞の後、生徒達のあまりにも多くの質問ため、3枚の絵の説明に、パーキンスの中等部の校長先生と、美術の先生2人、そして、高橋の通訳までも参加し、限りなく続く歓喜に満ちた質問に対応し説明しました。

あっというまに講義の1時間は過ぎ、教室では高橋の絵について、そして色について、絵画についての質問があふれてかえっていました。

そして、講義中1番多く高橋にかけられた

言葉は、「マリアありがとう、素晴らしい体験ができました。」「絵が鑑賞できるなんて思ってもいなかったです。」「これからもたくさんの絵を描いて見せて下さいね。」

パーキンス盲学校で子ども達から受け取った絵画鑑賞時の感動は、高橋のそれからのアート活動の原点となりました。

視覚障がい者の声 (2) 南米最大の盲学校

2016年夏リオのパラリンピック期間中、リオ市内にある南米最大のベンジャミン・コンスタン盲学校でマリスの作品展を開催しました。

会場である盲学校内ギャラリーのオープニングパーティーは身動きがとれないほどの人が集まり、会期中の来場者は2500人を記録しました。ブラジル国营放送のテレビ局も、パラリンピック初日と重なったマリス作品展を初日に取材、当日の夕方のニュースで、開会式と共に放映されました。作品展期間も好評の為1週間延長となりました。

特筆すべきは、生徒たちの中で毎日5人の常連さんができたことです。毎日、毎日、彼らは自分の友達や家族やクラスメイトを連れてやってきました。高校1年生の女子生徒が気に入ったのは画面いっぱい大きな一輪のポピーの花を描いた[マリス宣言]でした。「私はこの絵が1番好きよ! だって真っ赤なお花なんだもの!」全盲の彼女は当然のこのように言い切りました。

この絵は縦×横は110×110センチの絵画、鑑賞するには、砂一粒ずつ指先でたどっていく膨大な作業が必要です。何時間もかかり、細部から全体像をイメージし、組み立てることは、彼女にとって根気のいる読み解きです。しかし毎日ギャラリーに通い、絵を触りつづけました。驚いたことに初日から3週間、彼女は[マリス宣言]を鑑賞しに通い続けたのです。

彼女の知識欲は留まることを知らないようでした。いつの日にか、ブラジルが生み出したヘレン・ケラーになるかもしれません。絵に興味の薄い生徒たちにも、わかりやすい国旗は人気でした。レバノンの国旗のレバノン杉や、スイス国旗の十字の白い部分が好きな生徒も多くいました。日本の日の丸も人気でした。

国旗の前で、社会の先生は、自然に社会科の授業をし始め、地理の先生は地理の授業を始めました。生徒達は、まだ作り上がっていない国旗を指で探し、「早くできると言いなあ。これも出来上がったら、どんな国旗か観たいなあ！」大きな興味と期待で完成を待っていました。

視覚障がい者の声 (3) 労働者階級にも

予定では2回のはずが5回に急遽増えた美術の授業では2種類の課題を行いました。1題目は途中作りのマリス国旗の共同制作に全員が参加、2題目は絵葉書サイズのキャンバスに各自想い想いの絵をマリス技法で制作。通常この美術の授業では陶芸を教えており、時々、レースのリボンや段ボールや、素材の違いを利用したものを紙の台紙に貼り付けて作品作りを楽しんだりもしています。

盲学校の美術のクラスは大人クラスです。高橋にとって、今でも印象に残る35歳くらいの1人の男性がいます。

彼は普段重労働に携わっているようで、身なりも労働者階級の服装でした。彼はこの日始めて美術のクラスを受講したのですが、うまくマリスの砂を国旗に置くことができません。3人の先生達も、詳しく彼のことが分からなかったので授業の中で彼があまりにも砂を置かず、ポーっとしているので見とがめて、「美術の授業なのだから、わからなくてもわかるように、しっかり考えて、工夫して砂を置きなさい。」と、指導を入れます。しかしなぜか、彼の様子がおかしいのです。

よく見ると、砂とキャンバスの接着剤の役割をするアクリル絵具のメディウムが、彼の労働の為にできたひび割れた指先に沁みていました。彼はじっと我慢し、一言も言わないのです。高橋は彼の砂置きを手を取り教えようとして、はっと気がつき、日本から持ってきたステロイドを塗り、サランラップを食堂で手に入れてきて、薬のついた指の上に巻きつけました。彼の10本の指がサランラップでグルグル巻きになり、その授業は彼は聞いているだけで終わったのですが、「絶対帰りたくない！指が治ったら自分も国旗の共同制作をしたい！」と、教員に伝えていました。

次の週、彼は笑顔で再びやってきました。

このやり取り自体もアートの授業に参加していることになります。高い教育を受けていない労働者階級の人でもそうでなくても視覚障がい者の中には、美術の授業を受けたい、絵画を鑑賞したり、制作したい強い欲求があると断言できます。

視覚障がい者の声 (4) 盲教育の南米の権威の意見

リオデジャネイロでの企画を計画したベンジャミン・コンスタン盲学校の誇る南米盲教育の第一人者である全盲のグロリア教授。彼女はマリス作品展会期中、ギャラリーで絵を鑑賞した後にビデオカメラに向かい語りました。

「視覚障がい者の芸術活動とは、音楽を演奏するだけでなく、彫刻や絵画鑑賞も必要です。ブラジル政府の文部省は盲学校に美術のクラスは必要ない！と言ってくるのですが、私たちは絵や色や形を楽しみたいのです。そして人間として美術を楽しむ権利もあるのです。これは世界中の盲学校でも同じことが言えます。皆さんにもっとそのことを理解して欲しいのです。」

南米最大のベンジャミン盲学校は、盲教育を南米中に指導する役目を担っています。更にグロリア教授は続けました。「私たちはブラジルの抱える闇を訴え続けています。食べることで手いっぱいの人々が多い中で、視覚障がい者の人権や雇用問題はなかなか改善されていません。パラリンピック期間中、多くのメディアが障がい者の活躍をテレビで毎日伝えていました。しかし、大会終了と共に、テレビには健常者しか映らなくなったのです。パラリンピックは社会をどう変えていけるのでしょうか、メディアに再考を求めたいです。」

世界最大のパーキンス盲学校でも、南米最大のベンジャミン・コンスタン盲学校でも、マリスの絵画技法による、全盲の人も晴眼者と一緒に見える絵は、21世紀の視覚障害者の絵画鑑賞の扉を開きました。

これからも、高橋はマリスアートプロジェクトは、世界中の盲学校の子ども達に絵画を見せる活動を行って行きます。

デコレートアクション

デコレートアクションは高橋の造語。2011年に「NYの7つの美術館前デコレートアクション」を実施。ゲリラ的にマリス作品の展示を美術館の前で行いました。

美術館の外で視覚障害者も見える絵を展示することにより、開かれた美術鑑賞のあり方を提起。



ニューヨーク近代美術館前 (MoMA)



メトロポリタン美術館前



国立アメリカ・インディアン博物館前



クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館前



グッゲンハイム美術館前



ホイットニー美術館前



ジューイッシュ博物館前

Post-Social Sculptures

私は2019年AAA Parisの作品展を通して、たくさんのアーティスト達に呼びかけることで、アート 新しいムーブメント、名付けて post-social sculptures[PSS]の第一歩を行います。＊社会彫刻 social sculptureとは独のアーティスト ヨーゼフ・ボイス (1921～1986) が社会彫刻という社会的新しい芸術運動をはじめたが、その活動を継承しているアーティストはほぼいない。

このNSSの土台となる活動を2009年マリス発明から10年間してきました。ついに今回のAAA Parisでこの運動をスタートすることを公に発表します。

経緯

今までアーティスト側から視覚障がい者にも見える、といった障がい者に対して行動することは少なかったのです。私が[全人類が見える絵]を作ったことは、単なる絵画技法の発明にとどまりません。これは社会を変える単なる例の1つをあげたことなのです。

作品展の目的

[アーティスト達は世界を優しく変える武器を持っている！それを自覚して作品作りをしよう]と呼びかける。ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻のエッセンスのうち、政治や宗教を取り去り、東西の哲学とアニミズムを土台とし、[すべての人の自由と愛と平和]を芸術運動から発動。言い換えれば、[各々のアーティストには社会に貢献し、社会を優しく変える運動を起こす力がある。]という自覚を持ち作品を作るという新しい美術の流れを作り出します。それが2019ヨーロッパマリスツアーです。起点はAAA Paris。ヨーロッパの新しいアート運動PSSがAAA Parisから始まります。